昭和31年１月24日第三種郵便物認可　令和６年１月５日発行（隔月１回５日発行）「燈光」第69巻・第１号

燈光

1

新年あいさつ

燈光会会長　岩　崎　貞　二

新年おめでとうございます。

昨年は、久しぶりに総会の懇親会、灯台記念日の懇親会を実施できました。多くの方に参加いただき、また懐かしい方に会えてよかったと思っています。今年も開催する予定です。できるだけ参加いただければ。

参観してくれる人が順調に回復してきました。燈光会の一番の使命は、多くの方に灯台を楽しんでもらって、体験してもらって、知ってもらってだと思っています。昔のように年間１００万人を超えることは夢ですが、今年度は久しぶりに70万人を超えそうです。参観者数はずっと右肩下がりでした。「80万人」を目標にと景気よく言いたいところですが、地道に「70万人台を維持する」を目標に頑張りたいと思います。

収支も改善してきました。参観寄付金を２００円から３００円にしたこともあり、２０２２年度に引き続き今年度も黒字を確保できそうです。資料展示室の整備などを進めるとともに、燈光会の経営は不安定なので将来に備えて少しは貯めていく予定です。

当会の支所の職員も頑張っています。夕暮れ参観や夜間参観、地域の灯台を支援してくれている団体とコラボレーションしてのイベントなどを企画して実施しています。地味ですが、灯台の周りに花を植えています。こうした努力が直ちに参観者の大幅な増加につながっているとは思いませんが、燈光会が自ら努力してやっていることが、少しずつ実を結ぶと確信しています。

昨年11月には出雲市で４回目の灯台ワールドサミッ

トが開催されました。参観灯台がある市町村の集まりです。志摩市、御前崎市、銚子市、出雲市、男鹿市の市長さん、尻屋埼の東通村の村長さんが参加です。燈光会だけの力では不十分なので、これからは一層地方公共団体と連携を図る、支援をお願いすることが重要だと思っています。今は６つの市長、村長さんの集まりですが、燈光会が運営する16の灯台の市町村長、さらには航路標識協力団体として参観事業を実施している市町村にも働きかけ、メンバーを増やしていければ。市町村長さんに灯台が観光資源としても重要だということを理解いただくのに絶好の機会なので。

重要文化財の灯台が、昨年、文化審議会から当申された釣島灯台を含め14に増えました。燈光会が運営する灯台では、新たに尻屋埼が指定され、犬吠埼、御前埼、出雲日御碕、角島の５つになりました。ネットで調べたら重要文化財で特に価値があるものが国宝、建造物の重要文化財は２５５７件、国宝は２３０件です。確率から行くと灯台の１つは国宝になってもいいかと、夢見ています。

少し気になっているのは燈光会の会員が減少していること。特に海保の現役の人たちが減っています。仕事での灯台とのかかわりが徐々に薄くなっていること、また会費をいただいている割にはメリットが少ないことが原因と推測しています。メリットを増やすことができないかの検討もしますが、仕事でのかかわりが薄くなっても海保の皆さんには灯台のこと、灯台の歴史に関心を持ってもらいたいです。ノスタルジアかもしれませんが。

年頭のご挨拶

海上保安庁長官　石井昌平

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

平素からの海上保安業務に対するご支援・ご協力に対しまして、心よりお礼申し上げます。

また、(公社)燈光会におかれましては、灯台参観事業をはじめ、航路標識に関する理解促進にご尽力いただくとともに、海上交通の安全意識の向上にも貢献いただいており、重ねて感謝申し上げます。

昨年3月、我が国の海上の安全を取り巻く環境の変化や新たな時代の要請に的確に応えるべく「第5次交通ビジョン」が交通政策審議会から答申されました。海上保安庁においては、本ビジョンに基づき、次世代燃料船の燃料供給に対する安全対策、洋上風力発電設備の設置海域における安全対策、自動運航船の実用化に向けた安全対策、活発化・多様化するマリンレジャーに関する安全対策などの諸対策や、灯台等の耐災害性の強化などの取組を着実に推進してまいります。

また、平成30年に発生した関西国際空港連絡橋への船舶衝突事故を受け、大阪湾北部海域における船舶の動静監視及び情報提供体制の強化を図る観点から、昨年3月に大阪湾海上交通センターの管制機能を兵庫県淡路市から神戸市へ移転しました。さらに、昨年5月には平時における情報聴取義務海域の拡大及び異常気象等時における情報聴取義務海域の設定を行うとともに、昨年10月には同センターに明石海峡航路の航路管制と阪神港の港内交通管制を統合しました。本年2月には情報聴取義務海域の更なる拡大を予定しており、これをもって大阪湾海上交通センターの機能強化が完了します。引き続き、ふくそう海域における船舶交通の一層の安全確保に努めてまいります。

航路標識に関しては、地域の実情に応じた維持管理や知識の普及・啓発を行うための航路標識協力団体制度において、これまでに全国54箇所の灯台において燈光会をはじめ44団体を協力団体として指定してまいりましたが、昨年も多くの団体から申請があり、現在審査を行っているところです。引き続き、航路標識管理体制の充実強化や地域活性化に貢献してまいります。

また、昨年11月、文化審議会からの答申により、釣島灯台（愛媛県松山市）が重要文化財に指定されることとなりました。これで灯台の重要文化財指定は14件となります。灯台は、船舶の安全な航行に必要不可欠な「海のみちしるべ」ですが、近年においては歴史的、文化的価値を有するものとして注目されるとともに、観光資源としても親しまれるなど、新たな価値や役割を生み出しております。

さらに、昨年は、灯台記念日（11月1日）に係る関連行事も全国で開催され、当庁においても、地方公共団体や航路標識協力団体等と連携して全国各地の灯台で一般公開を行うとともに、各種施設で様々なイベントを開催いたしました。今後もこのような活動が灯台をはじめ航路標識の周知啓発と海上安全思想の普及に繋がっていくことを期待しております。

結びに、我が国の航路標識事業の発展に貢献してこられた皆様のご努力に対して、心より敬意を表するとともに、今後の一層のご活躍を祈念いたしまして、私の年頭のご挨拶とさせていただきます。

令和5年　交通部の主な取組

海上保安庁交通部企画課

1　地域観光振興に灯台の活用を推進

航行する船舶の指標となる灯台は、船舶交通の安全と船舶の運航能率の増進を図ることで国民の生活や経済活動を支える重要な交通インフラです。一方、灯台の中には、歴史的・文化的な価値を有するものや、周辺の風景と調和して美しい景観を生み出しているものが多くあり、地方公共団体や観光協会をはじめとする地元の団体が中心となって、貴重な観光資源として地域活性化のために活用いただいています。

海上保安庁はこうした地方公共団体などによる灯台の観光資源としての活用を支援しており、灯台の一般公開やライトアップ、企画展や講演会をはじめとする様々なイベントの開催など、全国各地で活用が進んでいます。

写真１　「石狩灯台お兄さん」への名誉灯台長の称号授与

① 「石狩灯台お兄さん」に対する石狩灯台名誉灯台長の称号の授与

石狩灯台の妖精に体を貸し、同灯台のＰＲ活動を積極的に実施いただいたとして、令和５年６月、「石狩灯台お兄さん」に対し、同灯台としては初となる名誉灯台長の称号を授与しました。

② 大槌港灯台点灯70周年を記念した絵画コンテストとライトアップの実施

ＮＨＫ人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルとされる岩手県の蓬莱島に位置する

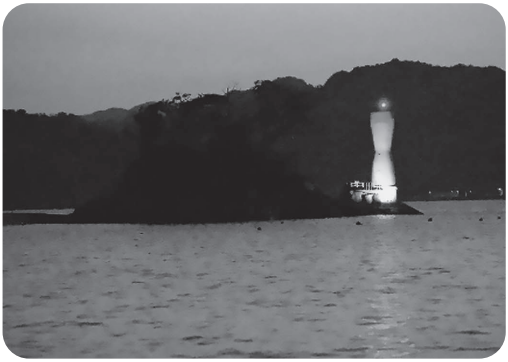


写真２　大槌港灯台のライトアップ

る大槌港灯台が昭和28年の点灯から70年を迎えることを記念して、令和5年11月、同灯台の絵画コンテスト及びライトアップを地元町民文化祭の開催に合わせて行いました。

③　伊勢志摩の灯台150周年記念イベント

菅島灯台及び安乗埼灯台が明治6年の点灯から150年を迎えたことを記念して、灯台が持つ歴史的・文化的な価値を地域の方々に発信するために、令和5年10月、三重県鳥羽市において、有識者による講演会や海上保安庁音楽隊によるコンサートを開催しました。

写真３　伊勢志摩の灯台150周年記念イベント

④　灯台ワールドサミットin出雲

令和5年11月、灯台が所在する自治体同士の連携強化や灯台観光振興方策の拡大を目的とした灯台ワールドサミットが島根県出雲市で開催され、新たに秋田県男鹿市（入道埼灯台）と青森県東通村（尻屋埼灯台）が「灯台活用推進市町村全国協議会」※に加盟する調印式が行われました。出雲日御碕灯台においては、地元グルメや特産品の販売や特設ステージコンサートなどが行われました。

写真４　灯台ワールドサミットin出雲

※銚子市（犬吠埼灯台）、御前崎市（御前埼灯台）、出雲市（出雲日御碕灯台）及び志摩市（大王埼灯台、安乗埼灯台）が発起自治体となり設置された協議会

2　航路標識協力団体の活動について

海上保安庁では、航路標識管理体制の充実と灯台活用による地域活性化に資するため、令和3年11月に航路標識協力団体制度を創設しました。令和6年1月現在、全国54箇所の灯台において、44団体が活動を行っています。

これらの団体によって様々な活動が行わ

れていますが、その事例の1つとして、令和3年度に航路標識協力団体に指定した一般社団法人美浜まちラボを紹介します。

（一社）美浜まちラボは、愛知県知多半島の西端に位置する野間埼灯台で活動する航路標識協力団体です。平成25年から町のシンボルである野間埼灯台を観光の目玉として活用するため活動しており、航路標識協力団体の指定を受けたことによって、長年の目標であった野間埼灯台の〝登れる化〟を実現しました。

（一社）美浜まちラボは、協力団体として野間埼灯台の環境美化活動のほか、土日祝日を中心とした野間埼灯台の一般公開やライトアップなどのイベントを開催し、同イベントを通じて野間埼灯台の歴史や役割といった知識の普及活動などを行っており、これらの取組は、地元美浜町のアピールにも繋がっております。

① 環境美化活動

一般公開やイベントを行う際に、灯台構内の清掃や草刈りを行っているほか、令和4年9月、コスプレ海ごみゼロ実行委員会とコラボして「コスプレde海ごみゼロ解放区at野間埼灯台」を行いました。

② 一般公開やイベント

野間埼灯台は、伊勢湾を一望できる観光地として多くの家族連れやカップル、地元住民が訪れるほか、結婚式の前撮りスポットとしても有名です。令和4年度は、16回の一般公開を行い、約1，500名の方が灯台に登りました。

また、令和5年においては、一般公開、夜間の灯台ライトアップ、プロジェクションマッピングなどのイベントを行うとともに、11月には、一般公募により「現代版　灯台守」を選任する等、灯台を核とした周辺地域の活性化を図っています。

コスプレde海ごみゼロ解放区at野間埼灯台

一般公開

世界アルツハイマーデー
オレンジライトアップ点灯
セレモニー

プロジェクション
マッピング

「現代版　灯台守」のお二人

入場料徴収

グッズ販売

更に、これらに附帯して、入場料の徴収、ネクタイ・Tシャツ・タオルなどのグッズ販売を行っており、環境美化活動等の経費に充てています。

3　第5次交通ビジョンについて

令和4年5月に国土交通大臣から交通政策審議会長へ「新たな時代における船舶交通をはじめとする海上の安全のための取組」について諮問し、令和5年3月28日、交通政策審議会から「第5次交通ビジョン」が答申されました。

交通ビジョンは、交通部が発足した平成15年度から5年ごとに、海上保安庁が行う海上安全行政の基本的な方向性や具体的な施策のあり方について、安全対策の評価や航行環境の変化等を踏まえ策定しているものです。

近年の我が国の海上の安全を取り巻く環境は、台風等の自然災害の激甚化、頻発化や、次世代エネルギー船舶燃料や洋上風力発電の進展、自動運航船の実用化の動き、マリンレジャーの活発化、多様化等、大きな変化を遂げてきています。更に、デジタル技術等の活用による海上安全行政の更なる高度化、効率化も期待されております。

第５次交通ビジョン

新たな時代における船舶交通をはじめとする海上の安全のための取組

令和５年３月28日、交通政策審議会から第５次交通ビジョン（新たな時代における船舶交通をはじめとする海上の安全のための取組）が答申されました。

本答申では、自然災害の激甚化、頻発化といった海上の安全をめぐる環境の変化を踏まえ、船舶交通をはじめとする海上の安全を確保するため海上保安庁が今後５年間において重点的に取り組むべき施策とその目標が示されました。

海上保安庁では、本ビジョンに基づく施策を着実に推進し、海上の安全の確保に取り組んで参ります。

海上の安全をめぐる環境の変化

- ✓ 自然災害の激甚化、頻発化
- ✓ 次世代エネルギー船舶燃料の進展
- ✓ 洋上風力発電の増加
- ✓ 自動運航船の実用化に向けた進展
- ✓ マリンレジャーの活発化、多様化
- ✓ 海上の安全に資する技術の進展

主な取り組み

- ■ 大阪湾海上交通センターの監視、情報提供体制の強化
- ■ 次世代エネルギー燃料船への燃料供給、洋上風力発電設備の設置、自動運航船の実用化等に対する安全対策
- ■ マリンレジャーの事故の要因分析を踏まえた安全対策
- ■ 灯台等の耐災害性の強化
- ■ ＶＤＥＳ※による新たな情報提供の検討

※VDES：VHF data exchange systemの略。
VHF帯の電波を使用した新たな海上デジタル通信システムであり、国際的に検討が進められている。

目　標

■ **ふくそう海域における大規模な船舶事故の防止**

ふくそう海域における航路を閉塞するような社会的影響が著しい大規模な船舶事故の発生数を**ゼロ**とする。

■ **ふくそう海域における衝突、乗揚げ事故隻数の減少**

ビジョン期間中の５か年の年平均事故隻数を**29隻以下**とする。

■ **船舶事故隻数の減少**

ビジョン期間の最終年（2027年）までに船舶事故隻数を**1,350隻以下**とすることを目指す。

海上保安庁では、このような環境の変化や新たな時代の要請に的確に応えるべく策定された「第5次交通ビジョン」に基づく施策を着実に推進し、海上交通の安全の確保に取り組んで参ります。

〈施　策〉

(1) 船舶交通安全に関する諸対策

① 大阪湾海上交通センターの監視、情報提供体制の強化の継続

② 海上交通センター等における安全対策

③ 次世代エネルギー燃料船への燃料供給に対する安全対策

④ 洋上風力発電設備の設置海域における安全対策

⑤ 自動運航船の実用化に向けた安全対策

⑥ その他継続的に取り組む安全対策

(2) マリンレジャーに関する安全対策

① プレジャーボートの機関故障対策

② プレジャーボートの操船経験の浅い者に向けた取組

③ 安全啓発に取り組む個人、団体等との協議

④ 現場指導体制の強化

(3) 海上交通基盤の充実強化

① 灯台等の耐災害性の強化の推進

② ＶＤＥＳによる新たな情報提供の検討

③ ＸＲ技術の活用による業務の効率化

④ ＷＥＢによる通報手段の導入

⑤ 航路標識協力団体制度の活用による維持、管理の充実化、効率化

4　国際航路標識協会（ＩＡＬＡ）の総会等への参加及びＩＡＬＡ会合の東京開催

新型コロナウイルス感染症の影響緩和により、令和5年からは国際会議への参加や、海上保安庁が主催する国際会議も開催が円滑に行えるようになりました。これに伴い、海上保安庁ではＩＡＬＡの各種会合等への積極的な参加や東京での会合等の主催を行いましたので、その中から以下の2つについてご紹介いたします。

●第14回ＩＡＬＡ総会並びに第77回及び第78回理事会

通常、総会は4年に1度開催され、その総会の前後では理事会が開催されます。令和5年には5月28日に第77回理事会、6月3日に第14回総会及び第78回理事会が開催され、これらの会議に3名の職員が参加しました。

海上保安庁は昭和34年にＩＡＬＡに加入し、昭和50年に初めて理事として選出されて以来、同ポストを獲得し続けており、この度の総会での理事選でも最多得票での再選を果たし、現在、12期連続で理事を務めています。

また、総会後の新たな理事により第78回理事会が開催され、常設技術委員会の１つであるデジタル技術（ＤＴＥＣ）委員会議長（ＥＮＡＶ委員会からこの度の理事会で改称）に当庁職員が再任されました。

第14回IALA総会での集合写真

IALA特別会合の様子（東京開催）

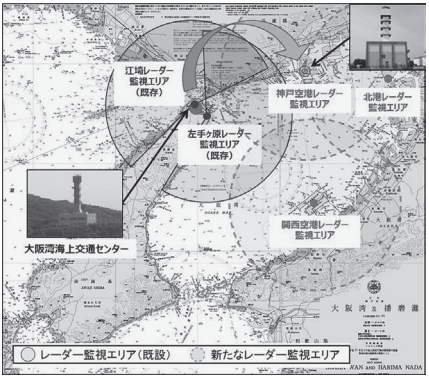
●ＩＡＬＡ特別会合の東京開催

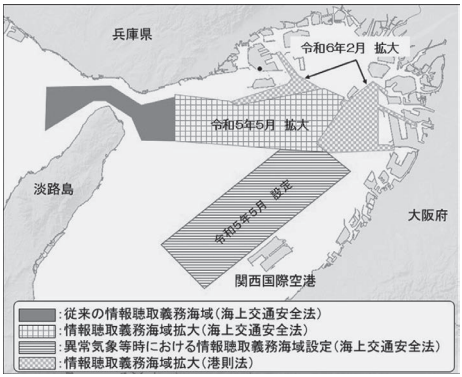
近年の加盟国増加及び新技術の発展に対応する航行援助分野の国際標準化の重要性の増大を背景に国際機関としての地位を確立することの必要性が認識されるようになり、令和２年に国際航路標識機関条約案が採択されました。我が国は、令和３年に同条約受諾に関する国会承認を経て、署名するとともに、同条約の受諾書をフランス政府に寄託し、締約国となっています。同条約は、30か国目の寄託から90日後に発効となります。

これに関連して、令和５年11月７日～10日の間、海上保安庁の主催のもと、同条約に基づく機関の運営に関する規則案を作成する会合を東京で開催し、国際機関化後に開催される総会に提出する草案に合意しました。

５　大阪湾海上交通センターの監視及び情報提供体制の強化

昨今の自然災害の激甚化、頻発化への対応として、海上空港などの臨海部に立地する施設の周辺海域における走錨事故対策、異常気象等時における事故防止対策を適切に推進していくこ





大阪湾海上交通センター運用管制室

とが必要となっています。特に、平成30年9月の台風21号の影響により発生した関西国際空港連絡橋への船舶衝突事故では、空港アクセスが遮断され、人流・物流に甚大な影響を及ぼしました。

海上保安庁ではこれを受け、大阪湾北部海域（関西国際空港周辺海域以北の海域）における船舶の動静監視及び船舶への情報提供体制の強化を図るため、レーダー及び監視カメラを増設しました。

また、第五管区海上保安本部と大阪湾海上交通センターのさらなる連携強化を図る観点から、令和5年3月に同センターの管制機能を兵庫県淡路市から神戸市へ移転しました。

さらに、令和5年5月には平時における情報聴取義務海域の拡大及び異常気象等時における情報聴取義務海域の設定を行うとともに、令和5年10月には同センターに明石海峡航路の航路管制と阪神港の港内交通管制を統合しました。

海上保安庁としましては、引き続き、ふくそう海域における船舶交通の安全確保に努めてまいります。

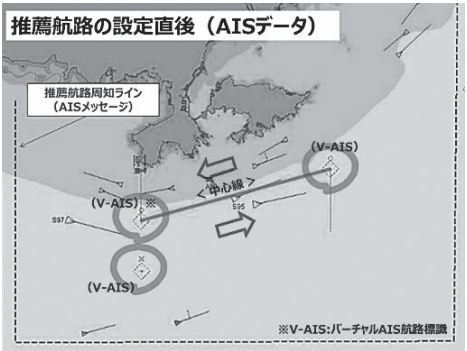
6　和歌山県潮岬沖における新たな推薦航路の設定について

令和4年11月、国際海事機関（ＩＭＯ）の第１０６回海上安全委員会において、我が国が提案した和歌山県潮岬沖における推薦航路が採択されました。

推薦航路とは、海上人命安全条約（ＳＯＬＡＳ条約）第Ⅴ章第10規則に基づき、ＩＭＯが指定する航路の一つで、航路の中心線を定め行き会う船舶が進行方向の右側を航行するよう推奨することで、船舶交通の整流化を図るものです。

和歌山県潮岬沖の推薦航路は、我が国で2例目となる航路であり、令和5年6月1日午前9時（日本時間）から運用を開始しました。

なお、推薦航路の運用開始に伴い、航路の各基点にバーチャルＡＩＳ航路標識（船舶の航海用レーダー画面上に航路標識が実在するかのように表示させるシンボルマーク）を明示するとともに、海図にも掲載することで、船舶の運航者が推薦航路を認知できるようにしています。



和歌山県潮岬の沿岸は、東京湾、伊勢湾、大阪湾などを結ぶ海上交通の要衝で、外国船舶を含む船舶の通航量が多く、加えて漁業活動も活発な海域ですが、推薦航路の設定により安全性の向上が期待されます。

海上保安庁としましては、引き続きＡＩＳを活用した航行安全システム

を運用し、船舶交通の安全確保に努めてまいります。

7　マリンレジャーの海難防止対策

海上保安庁では、船舶の運航やマリンレジャーに伴う事故の減少を目指し、様々な海難防止対策を講じています。

今回は、マリンレジャーの海難防止対策として特に力を入れている「ウォーターセーフティガイド」についてご紹介させていただきます。

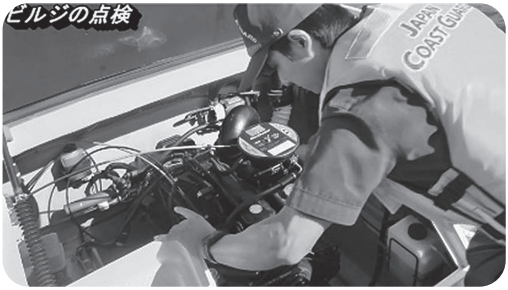
ウォーターセーフティガイドとは、モーターボート、ミニボート、水上オートバイ、カヌー、SUP、釣り、遊泳、スノーケリングの8つのマリンレジャーについて事故防止のための情報をまとめた総合安全情報サイトで、平成30年4月から運用を開始しています。本ガイドは、海上保安庁単独で作成して公表するのではなく、各マリンレジャーの安全推進に関わる国の機関、団体や事業者など関係者が一堂に会し、建設的な意見交換、議論を経て合意形成を図ったうえで公表することとしています。作成主体が遵守し、普及の主体ともなることを企図した取り組みでもあり、この作成プロセスによっても関係者間の連携の強化・深化にも力をいれております。

令和5年においては、ウォーターセーフティガイドに関して次のような取組を行っています。

● モーターボート編の新設

プレジャーボートの事故は船舶事故の約半数を占め、事故の種類では機関故障が最も多い状況です。

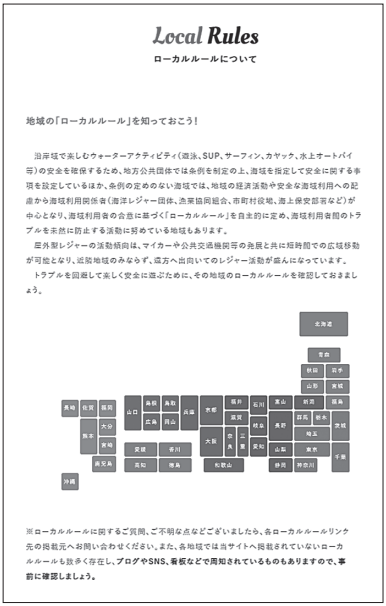
また、近年のマリンレジャーブームによる小型船舶操縦士試験合格者数が増加していたことから、ビギナー船長向けにモーターボートを運航する上で必要な安全意識や実践的な知識の向上を図るため新設しました。



モーターボート編の掲載動画

● ローカルルールの掲載

地域ごとのローカルルールを知らない者による事故やトラブルが散見されることから、愛好者が事前に活動水域のローカルルールを把握できるようにするため、当庁が把握している全国各地のローカルルールを掲載しました。



Local Rules

ローカルルールについて

地域の「ローカルルール」を知っておこう！

沿岸域で楽しむウォーターアクティビティ（遊泳、SUP、サーフィン、カヤック、水上オートバイ等）の安全を確保するため、地方公共団体では条例を制定の上、海域を指定して安全に関する事項を設定しているほか、条例の定めのない海域では、地域の経済活動や安全な海域利用への記事から海域利用関係者（海洋レジャー団体、漁業協同組合、市町村役地、海上保安部署など）が中心となり、海域利用者の合意に基づく「ローカルルール」を自主的に定め、海域利用者間のトラブルを未然に防止する活動に努めている地域もあります。

屋外型レジャーの活動傾向は、マイカーや公共交通機関等の発展と共に短時間での広域移動が可能となり、近隣地域のみならず、遠方へ出向いてのレジャー活動が盛んになっています。

トラブルを回避して楽しく安全に遊ぶために、その地域のローカルルールを確認しておきましょう。

※ローカルルールに関するご質問、ご不明な点などございましたら、各ローカルルールリンク先の掲載元へお問い合わせください。また、各地域では当サイトへ掲載されていないローカルルールも数多く存在し、ブログやSNS、看板などで周知されているものもありますので、事前に確認しましょう。

ローカルルールの掲載状況

● アンケート機能の追加

サイトを閲覧してくださった皆様からの意見を収集し、内容の充実を図るために、令和5年6月からアンケート機能を追加しました。利用する方の生の声を聞きながら、より良いサイトの運営を実施していきたいと考えています。

海上保安庁では、引き続き、マリンレジャーの海難防止対策としてウォーターセーフティガイドの充実強化など関係者間の連携による各種施策の展開によりオールジャパンで海の安全を推進して参ります。

ＷＳＧのＱＲコード

8　絶海の孤島における灯台復旧

久六島（きゅうろくしま）は、青森県艫作崎（へなしざき）から西北西17海里の位置に浮かぶ長さ約50メートル、幅約14メートルの小さな無人島です。島内にそびえる久六島灯台は、昭和34年に設置されて以来、沖合を航行する船舶の指標となる重要な航路標識として、通航船舶の安全を見守り続けてきました。60余年もの間、厳冬の日本海特有の風浪に耐え続けた久六島灯台ですが、令和3年2月、発達した低気圧による暴風及び波浪によって、灯塔外壁や踊場の一部が欠損する被害に見舞われました。これを受け、第二管区海上保安本部では、更なる欠損や倒壊を防止するため、速やかに復旧工事の検討に着手しました。

しかし、3つの問題に直面し、復旧工事は難航を極めました。1つ目の問題は、厳しい自然環境です。小島という立地の特異性から、気象海象が工事の進行に大きく影響します。2つ目の問題は、工事期間が限定されることです。灯台設置場所の標高は6メートルと海面に近く、わずかな波浪・うねりであっても越波するため、工事の実施は比較的海が穏やかな春先の数カ

月間に限定されます。３つ目の問題は、施工場所が極めて狭隘なことです。島内面積はわずか７００平方メートル程度で、工事資器材の保管場所を十分に確保することも困難でした。これらの事情から従来の施工方法（鉄筋コンクリート造による建替え）では、完遂まで2年以上もの期間を要することとなり、この3つの問題を解決し速やかに復旧させる新たな工法の導入が求められました。

こうした事情を受け、第二管区海上保安本部では、従前にとらわれない最適な施工方法を模索した結果、工場で鋼製灯塔を製造して現場で設置する方法を採用することとしました。この工法では灯塔の製造を冬期間に完了させ、現場施工が可能な3ヵ月間に設置が見込めるため、従来の工法と比べはるかに短い工期での施工が可能です。また、工場で灯塔の組み立てを行うため、現地での作業が大幅に省略化でき、気象海象の影響や作業スペースの問題も解決することが可能です。新たな工法の導入により、施工に伴う課題を解決し、更に従来の施工方法より短い工期で復旧を完了させることができました。（令和5年7月復旧）

海上保安庁では、このように施工の難しい環境下においても、灯台をはじめとする各種航路標識を適切に整備・管理することにより、船舶交通の安全と運航能率の向上に努めてまいります。

① 損害状況

② 工場における灯塔製造

③ 復旧状況

伊勢志摩の灯台ー150周年記念イベント

～講演会＆音楽隊アンサンブルコンサート～

第四管区海上保安本部交通部企画課

第四管区海上保安本部管内の安乗埼灯台（初点灯：明治6年4月1日）と菅島灯台（初点灯：明治6年7月1日）が150周年を迎えたことから、10月14日（土）三重県鳥羽市において有識者による講演会と海上保安庁音楽隊6名によるアンサンブルコンサートを開催しました。

菅島灯台は、150年前に建設された灯塔を使用しており、レンガ造の現役灯台としては国内最古であり、昨年9月にはその文化財価値が評価され、国の重要文化財に指定されたほか、地元小学生の校外学習にも活用されています。

安乗埼灯台の初代灯塔は、木造八角形で素材、形ともに特徴的でしたが、老朽化により、現在の鉄筋コンクリート造四角形に建て替えられています。また、国の有形文化財に登録され、のぼれる灯台としても親しまれています。

今回のイベントは、地域のシンボル

一般の方から寄贈された木工模型です。

である灯台が１５０周年という大きな節目を迎えるにあたり、灯台の歴史的価値のほか、東海地方でいち早く伊勢志摩に洋式灯台が建設された背景など、この地に関わる歴史・文化を再発見、再認識し、灯台周辺の豊かな自然環境とともに広く発信することの重要性を地域の方々と共有し、灯台を活用した観光をはじめとする、更なる地域振興の役に立てればとの思いから企画したものです。

このような観点から、次の４名の方にご講演をいただきましたので、紙面の関係から概要のみを紹介いたします。

講演会の様子

バーチャルリアリティ（VR）体験

記念品ガチャ
(公財)海上保安協会東海地方本部及び(公社)燈光会のご協力により設置

【文化庁・文化財調査官】

菅島灯台が諸外国との約束により建設されたものではなく、江戸時代からあった「かがり火堂」の代わりとして建設されたものであること、国内に現存するレンガ造り建造物として最古級であることなど、文化財として高く評価されたとのお話をいただきました。

また、近代の文化遺産を保存・活用するための文化庁の取組みについても、紹介していただきました。

【鳥羽郷土史会】

伊勢志摩のリアス式海岸は天然の良港であったことから、江戸時代、西廻り航路の風待ち港として栄え、「かがり火堂」以外にも古くから船を安全に導く目印が数

多く存在したことを紹介していただきました。

【博物館明治村　主任学芸員】

博物館明治村が開村するに至った経緯や同村が果たす役割のほか、展示されている品川燈台をはじめとした多数の航路標識について紹介していただきました。

【志摩市観光協会会長】

灯台の観光活用と歴史的な価値の検証を行う「灯台活用推進市町村全国協議会」の設立、志摩市で開催された第1回灯台ワールドサミットの実行委員として携われ、航路標識協力団体としての活動のほか、今後の活動の展望などを紹介していただきました。

講演会は、多島美を誇る鳥羽港が一望できるマリンターミナルで開催し、地元以外の方も含め約100名の方々に参加していただき、熱心にメモを取られる方もいらっしゃいました。

また、講演の合間と最後には、海上保安庁音楽隊6名によるアンサンブル演奏を楽しんでいただき、最後の演奏では会場が一体となり、盛況のうちに終了することができました。

開催に漕ぎつけるまで幾多の紆余曲折がありましたが、開催地である鳥羽海上保安部と地元との良好な関係に助けられた面も多々あり、常日頃からの地域との関係構築の重要性を再認識する良い機会となりました。

主催：第四管区海上保安本部

後援：三重県、鳥羽市、鳥羽商工会議所、志摩市、志摩市灯台活用推進協議会、（公財）日本海事センター、（公財）海上保安協会、（公社）燈光会、（公社）伊勢志摩観光コンベンション機構、（一社）鳥羽市観光協会、（一社）志摩市観光協会

講演会の合間に音楽隊アンサンブルコンサート

灯室を特別公開！夜は灯台イルミネーション!?

～潮岬灯台点灯150周年記念イベント～

田辺海上保安部

本州最南端にある潮岬灯台は、明治6（1873）年9月15日に点灯し、令和5（2023）年9月15日で点灯150年を迎えたことから、これを記念して11月11日(土)に、イベントを実施しました。

イベントは、通常公開しない灯室を特別に公開するものです。灯室特別入場者は、抽選により決定することとしましたが、定員75名としていたところ、応募は51名と若干下回ってしまいました。。。しかし、一組あたりの人数が少なくなったグループもありましたので、ゆっくり見学してもらえたのではないかと思います。

写真１　灯台の状況（日中）

特別入場者51名に加え、一般参観者137名と、たくさんの方が潮岬灯台へ訪れてくれました。地元の方だけではなく、北海道、東京都、岐阜県等の遠方から来て下さった方もいました。灯台を愛する方々が来られていて、潮岬灯台に何時間も滞在して、灯台や景色を満喫されていました。

灯室見学を終えた特別入場者に、灯室見学についてインタビューしてみたところ、

- 何回か見学しに来たことはありますが、灯室は見たことがないので感動しました
- 潮岬まで遠かったのですが、今日は来て良かったです
- いい体験ができました
- また来たいです

等の感想があり、「当選して良かった!!」と、終始笑

顔で受け答えしてくれましたので、イベントを実施して良かったと感じました。

そして辺りが薄暗くなり始めた17時頃。灯台イルミネーションが点灯！イルミネーションが点かないハプニングもありましたが、なんとか点灯することに成功しました！周りには街灯もないので、18時頃になると真っ暗になり、灯台イルミネーションの邪魔となる灯りは何もありません。日中来られていた方も、付近を観光された後、イルミネーションを見にいらっしゃいました。19時頃までイベントは続きましたが、参観者は絶えることなく訪れ、楽しい一日となりました。

特別入場者には、燈光会から後援して頂いて作成した「潮岬灯台初点１５０年のアクリルスタンド」を配布しました。アクリルスタンドを受け取った特別入場者は、「帰ったら直ぐに飾ります」と言って、とても喜んでいる様子でした。（大好評‼）一般参観者にも数量限定ですが配布し、喜んで頂きました。

燈光会をはじめ、管区本部及び関係者の皆様のご協力に感謝いたします。

ありがとうございました。

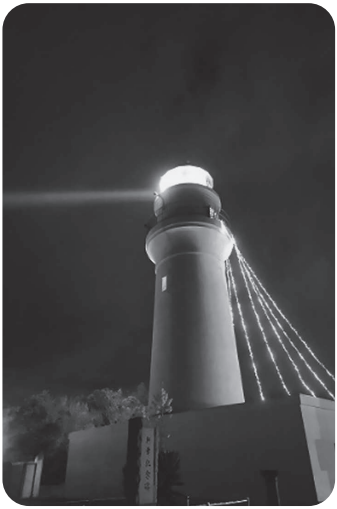


写真２　灯台の状況（夕暮れ）

写真３　アクリルスタンド

波津港第一防波堤灯台お別れセレモニー

若松海上保安部

若松海上保安部が管理する「波津港第一防波堤灯台」は福岡県岡垣町波津漁港に位置し、付近には波津海岸などもあって、夏には海水浴でにぎわいます。普段は釣りをする人々の憩いの場ともなっており、そんなのどかな風景に溶け込んだ景色の一部となっていますが、港湾計画により防波堤が延伸され、簡易標識が設置されたことや、同灯台の老朽化も影響し、波津の景色からなくなることが決定されました。そこで、これまでの地域の安全を守ってきた灯台に感謝し、地域の児童たちと一緒にお別れ会を行うことで、灯台の意義や重要性、また魅力を伝えることにより海上交通安全の普及啓発につなげるセレモニーを行うこととしました。

【セレモニー内容】

1　実施日、場所　10月11日(水)1315～1530
岡垣町立内浦小学校及び波津漁港

2　参加者
内浦小学校児童　23名（5年生及び6年生）及び教諭
若松海上保安部職員　6名　及び
海上保安マイスター（前畑正信氏）

3　実施内容

(1)　小学校校舎前にてお別れセレモニー開会式（校長先生挨拶、当部次長挨拶）

・校長先生からセレモニー企画の提供に感謝の言葉があり、その後、児童へ防波堤灯台の正式名称や歴史などの説明がありました。その後、交通担当次長から灯台が廃止される理由などの説明を受けていました。

(2)　開会式終了次第、波津漁港まで徒歩にて出発

近くの波津駐在所へは事前に行事について知らせていましたので、開会式から出席してくださり、灯台までの道のりのパトロールもしてくれました。また複数、ＰＴＡのお母さま方もカメラマンとして付

き添って、楽しく安全に移動しました。

(3) 漁港到着後

① 6年生：防波堤灯台にて「灯台機器の説明」「灯台内部へのお別れメッセージ記入・飾り付け」

灯台に初めて行く児童も多く、交通担当次長からは灯台の仕組みの説明が、実際のＬＥＤ灯器、配電盤、太陽光パネルを接続した模擬灯器を準備して行われました。大変わかりやすかったことから児童も興味津々でした。その後、灯台内部へ飾り付けを行い、児童1人1人にお別れメッセージを書いてもらいましたが、小学生らしいメッセージもあれば、灯台の仕事をしてみたい！と力強いメッセージもあり、私たち職員も大変うれしい内容でした。また急遽、岡垣町教育委員会教育長も現場入りし、児童の様子を見て感激していました。

写真２　仕組みの説明

写真３　メッセージを書く児童

写真４　作文の読み上げ

②　児童代表による灯台への「お別れの言葉」

波津地区に住む5年生の松下遥海（はるか）さんが灯台での思い出や灯台への感謝の気持ちを綴った作文を灯台に向かって読み上げ、その後、児童みんなで灯台に一礼し、大きな声で「ありがとうございました！」と感謝を伝えてくれました。作文を読み上げた松下さんにはセレモニーが終わるや囲み取材が行われたくらいに、すばらしい内容でした。作文の内容は次の通りです。

波津の灯台

内浦小学校　5年　松下遥海

夏。私は暑いのがとても苦手です。

でも、夜は涼しくなるので、私は姉と夜の散歩に出かけます。

姉との散歩では堤防によくいきます。堤防はとても涼しく、月が出る夜は、海面に映った月がとてもきれいです。

月の横にチカッと光る何かがあります。

「ああ。灯台だ。」

姉がスマホで、月を撮りながら

「点滅してるね。」といいました。

点滅する灯台や海に映る月を見ながらの散歩は、とても気持ちいいです。

まだ、私が幼いころ、家族で海に行ったとき、

「あの赤いのは何？」と聞いたら、母が

「ああ、灯台のこと。」と教えてくれました。

私は灯台を見ると、そのころのことを思い出します。

そのころは、灯台がなぜあるのか分からず、あまり意識していなかったけれど、散歩の時に見かけたり、学校に行くときや出かけるときには灯台を見たり、灯台のある風景が当たり前になっていました。

しかし、長い間、波津の海を見守っていた灯台が今年、その役目を終えて撤去されることになりました。学校に行くときや散歩の時に見えていた赤い塔は見ることができなくなります。わたしは、夜の散歩のとき、灯台の横に月が出て、海面に灯台がはっきり映し出される様子がとても好きでした。

灯台から明るい光を送っていたレンズは、内浦小学校に、私たち5，6年生の手紙と一緒に保管されます。これから、わたしの思い出やみんなの気持ちはレンズといっしょに内浦小学校に残っていきます。
いつも目にしていた灯台がなくなってしまうのは悲しいけれど、長い間、波津を見守ってくれた灯台にとても感謝しています。

写真５　手紙を投入する児童

(4)　内浦小学校１５０周年事前行事
タイムカプセルに将来の自分宛手紙の投入

写真６　６年生の記念撮影

近々、内浦小学校は創立１５０周年を迎えるそうです。その事前行事として、防波堤灯台でかつて使用されていたものと同型の３００ミリレンズを加工し、鍵付きのタイムカプセルにして、小学校へ寄贈しました。タイムカプセルには児童の皆さんが将来の自分に宛てた手紙を投入しし、校長先生の話では10年後くらいにみんなで開放しましょうと案内されておりました。全員が手紙を投入した後、６年生の代表児童が鍵をかけ、校長室で保管されることとなりました。

4　おわりに

当日は読売新聞、毎日新聞、西日本新聞の記者取材もあり、地元紙面に児童の生き生きと楽しんでいる様子が掲載されるだけでなく、各記者から灯台に対する敬意が感じられ、灯台に関して続報を掲載したいとの話もあり、報道機関を通じ灯台を活用した安全啓発や海保の認知度向上にも寄与できたのではないかと考えています。

灯台ワールドサミットin出雲開催！
～出雲日御碕灯台120周年～

境海上保安部交通課

令和5年11月3日島根県出雲市において、「灯台ワールドサミットin出雲」が開催されました。

1　灯台ワールドサミットとは

灯台ワールドサミットは、灯台を観光資源として活用していただくため、灯台の文化的な価値を再発見・確認し連携して灯台観光を通じて地域の活性化を図っていこうとするもので、志摩市の呼びかけにより参観灯台のある千葉県銚子市、静岡県御前崎市及び島根県出雲市が発起自治体となり「灯台活用推進市町村全国協議会」が発足され、平成30年11月に志摩市で第1回が開催されました。

以後、毎年持ち回りで開催される予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の拡大による延期もあり、令和3年には御前崎市で3年ぶりに開催し、ようやく4回目の開催で出雲市「出雲日御碕灯台」の出番となりました。

開催に向けて主催する出雲市が中心となり、各市、関係団体及び地元住民と、イベント内容などの打ち合わせを前年度から重ね準備してきました。（写真1）

2　サミット概要

今回、出雲市で開催されるワールドサミットは、大社文化プレイスうらら館（出雲市大社町杵築南）をメ

写真1
灯台ワールドサミットin出雲
ポスター

イン会場としてシンポジウム、地域特産品販売等が行われ、また、出雲日御碕灯台周辺エリア（出雲市大社町日御碕）では、灯台一般公開、灯台特設ステージでのイベント開催、さらに日御碕や地元のグルメを揃えた「出雲日御碕まるごとマルシェ」が軒を連ねて来訪者を迎えました。

3　サミット実施状況

〔シンポジウム会場（大社文化プレイスうらら館）〕

開催を祝して午前中には、サミット開催記念パレードが大社文化プレイスうらら館近くの神門通り（出雲大社前大通り）にて開催されました。当日は天気もよく、出雲大社前には大勢の観客が訪れており、パレードには地元ボーイスカウト、高校生のマーチングバンド及び6首長（志摩市長、銚子市長、御前崎市長、出雲市長、男鹿市長、東通村長）・「灯台どうだい？」編集長である不動まゆう氏のサミット関係者に加え、海上自衛隊呉音楽隊も駆けつけ、パレードを盛り上げていただきました。（写真2）

午後からは、大社文化プレイスうらら館でシンポジ

写真２　記念パレード

写真３　出雲市長からの開催挨拶

写真４　君塚交通部長の祝辞

ウムが開催されました。

灯台活用推進市町村全国協議会の会長である出雲市の飯塚市長の挨拶からスタートし、続いて本サミットの後援者であり、来賓として出席した海上保安庁交通部長の君塚部長が祝辞を述べられました。（写真3・4）また、参議院議員の青木一彦議員、衆議院議員の高見やすひろ議員からのお祝いメッセージが紹介された後、ご出席いただいた公益社団法人燈光会の岩崎会長、一般財団法人日本航路標識協会の竹安副会長がそれぞれ紹介されました。

写真５　ブルネイからのビデオレター

写真６　６首長そろっての調印及び共同宣言

次に海外からのお祝いメッセージとして日本航路標識協会の塚越部長よりブルネイ王国からのビデオメッセージが披露され、そこではブルネイ唯一の灯台が紹介され、出雲市に記念の写真が贈呈されました。（写真5）

今回、灯台活用推進市町村全国協議会規約の改正及び秋田県男鹿市、青森県東通村が新たに協議会の会員に参加することについて動議が提出され、異議なく同意され、6首長での調印及び共同宣言が読み上げられました。（写真6）

シンポジウムは本題へと進み灯台の活用についての議論となり、初めに、参画自治体からは「我がまち自慢」として、各市町村での取り組み状況や灯台利活用の状況などがプレゼン形式で発表されました。各市町村の代表として熱のこもったプレゼンで、発表後には「すばらしい取り組みですね」などの発言もあり有効な情報交換の場となりました。（写真7）

続いてパネルディスカッションが不動まゆう氏の司会により進められ、討議の前に不動氏自ら世界の灯台の観光資源としての活用事例が紹

介されました。討議にはフランスからお越しの出雲市観光交流部インバウンド推進課アンジ・スワン国際交流員も加わり、アンジ氏によりフランスの灯台が紹介されました。

また、各市のインバウンドの取り組みを絡めた日本の灯台を世界に発信していくためのアイデアを出しあう意見交換が繰り広げられ、灯台愛の強い不動氏からの質問に対しては、各市長等は少々困惑しながらも、それぞれの思いを伝え、和やかな意見交換会となりました。（写真8）

写真７　銚子市長から我がまち自慢で犬吠埼灯台を紹介

写真８　海外での灯台活用事例の紹介

以上でシンポジウムのすべてが終了し、閉会式では次回開催予定の銚子市の越川市長からの来年の意気込みをいただき、幕が閉ざされました。

シンポジウムが開催される中、イベント会場では、各自治体には展示ブースが用意され、そこでは地元灯台・観光地などが紹介され、（公社）燈光会では灯台のパネル展示、灯台グッズ、フォトカードなどを用意し、（一財）日本航路標識協会では出雲日御碕灯台の構造、歴史などのパネル展示を実施しました。

境海上保安部では灯台をモデルとした鉛筆画（交通次長作）、灯台ペーパークラフトを展示し、記念品として灯台ポストカードを用意するなど、各展示ブースでは灯台の魅力を最大限にアピールしており、サミットに来場された方々は講演の合間に見学し興味深そうに見入っていました。（写真9・10）

小ホールでは（一財）日本航路標識協会による小学生を対象としたラジオ工作教室が開催され、参加した小学生達は使い慣れない半田ゴテなどの工具と格闘しながらラジオ製作を楽しんでいました。この、ラジオ工作で海上保安業務でも使われる電波・機器への興味をきっかけに海上保安庁に興味をもってもらい、将来

の海上保安官になってもらえることに期待したいと思います。（写真11）

一方、会場の外では、各自治体のブースが設置され、名産品等が提供されていました。中でも事務局が実施した各自治体の特産品をブレンドし、煮込まれた「ワールドサミット特製カレー」は目玉商品となりました。（写真12）

〔イベント会場（出雲日御碕灯台周辺）〕

出雲日御碕灯台エリアでは、地元の方が中心にイベントを企画され、来場者を出迎えていました。灯台敷地内には特設ステージを設け、地元出身の歌手による歌の披露のほか、男鹿市から駆け付けてくれた「なまはげ」の『なまはげ太鼓恩荷』の演舞で盛り上げていただきました。灯台に続く道には、日御碕や地元のグルメを揃えた「出雲日御碕まるごとマルシェ」（飲食ブース）が立ち並び灯台に訪れる方はおいしい匂いに魅かれながら灯台に導かれていました。

灯台入口には海上保安庁マスコットの「うみまる」

写真９　自治体展示ブースでの紹介

写真10　来場者に記念品をプレゼント

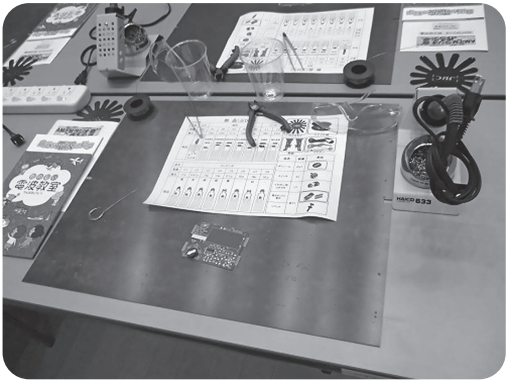


写真11　ラジオ工作部品「細かい作業です！」

も登場し、記念写真を撮る親子連れに追われ、イベントの脇で盛り上げ役として活躍しました。また、当日は、美保航空基地の航空機の展示飛行も行われ来場された皆様からは歓喜の声があがっていました。（写真13・14）

4　交流会（レセプション）

これまで新型コロナウイルス感染症予防で自粛していた飲食関係でしたが、5類感染症への移行に伴い、今回は制限なしの交流会となり、各首長のほか、関係団体などが一堂に会し、出雲ロイヤルホテルの会場において交流会が開催されました。（写真15）

主催者である飯塚会長（出雲市長）からサミットに参加いただいた方々への感謝と、更なる灯台の魅力を全国に、全世界に発信するとの熱いお言葉をいただき、島根県議会の園山議長の乾杯で宴が始まりました。

舞台では、出雲日御碕灯台特設ステージで演舞を披露された男鹿市『なまはげ太鼓恩荷』が再度登場、舞

写真12　ワールドサミット特製カレー　おいしそう！
ワールドサミット特製カレー限定100食
中には
青森県東通村：スルメイカ、ホタテ
御前崎市：牛肉　男鹿市：お米
出雲市：野菜　など
お隣は「出雲おでん」

写真13　灯台周辺エリア

写真14　海上保安庁航空機の展示飛行

台を盛り上げていたき、参加者全員の心が一つになり、大きな声援が沸き上がりました。（写真16）

次に各自治体より、持ち寄った特産品の紹介が行われ、各自治体工夫をこらしたＰＲ合戦となりました。（写真17）

会も終盤となり、灯台のテーマソングである「喜びも悲しみも幾歳月」を全員で斉唱！中締めとして、次期開催首長である越川銚子市長から、次期開催に向けての意気込みのお言葉により交流会は終了しました。

写真15　交流会会場

写真16　なまはげ太鼓恩荷

写真17　自治体PR合戦

5　最後に

今回のサミットは、主催関係者にあっては開催内容の検討、見直しなど準備に大変苦労が多かったことかと思います。無事にそして盛大に開催されたことに心より感謝申し上げます。

出雲市での開催は今回が初めてでしたが、２つの会場でそれぞれ盛大に、開催されたことで、出雲日御碕灯台、出雲大社周辺をより多くの方にご紹介できて皆様に満足いただけたものと感じております。

海上保安庁としても、引き続き地元自治体等と連携協力しながら、灯台を活用した地域振興に役立てていただけるよう協力していきたいと思います。次年度は、千葉県銚子市の犬吠埼灯台での開催となっておりますので、期待していただければと思います。

灯台記念日関連行事

石狩灯台一般公開＆ライトアップＤＡＹ

小樽海上保安部

令和５年10月28日、灯台記念日に先立ち、北海道石狩市所在の石狩灯台において、（一社）石狩観光協会様と小樽海上保安部の共催、（公社）燈光会様の後援により、各種イベントを実施しました。

当庁では石狩灯台内部の一般公開のほか、付近観光施設「はまなすの丘公園　ヴィジターセンター」内の一部を借りて、石狩灯台クイズラリーや制服試着体験、ミニ灯台制作体験等を実施しました。

イベントには今年６月に石狩灯台名誉灯台長の称号を授与した「石狩灯台お兄さん」も降臨（登場）し、当庁イメージキャラクター「うみまる」とのコラボレーションも相まって、多くの来場者が写真撮影等でにぎわいました。

当日は、千歳基地の協力により航空機の展示飛行も行われ、天候が良かったため、行きと帰り２度のローパスが実現し、来場客が歓声とともに航空機に手を振る様子も見られました。

今回初めて行った「ミニ灯台制作コーナー」は、プラコップとカップケーキ容器を組み合わせて制作した「ミニ灯台」にカラフルなマスキングテープやシール、ペンで自由に装飾をしてもらい、ミニＬＥＤで明かりを灯して「君だけの灯台を作ろう！」という新しい試みで、年少者を中心に想定を上回る人気を博し、多くの「オリジナルミニ灯台」が点灯し、各家庭へ持ち帰られました。

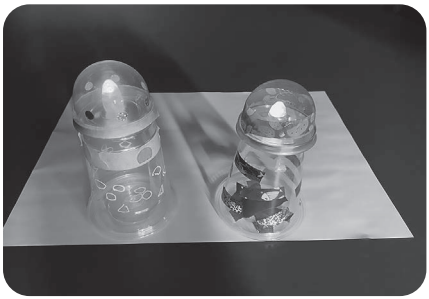
当コーナーは保安部職員が「子供にも楽しい催しを」との思いで企画したもので、職員のご家族からの意見も取り入れられており、結果、いくつもの個性的な灯台が誕生し、大成功となりました。

一般公開は日没頃に終了し、引き続き石狩灯台のライトアップが実施されました。夜空を背景に浮かび上

がる北海道最古の灯台という幻想的な光景に、多くの人がカメラのシャッターを切っていました。

最終的に灯台内部の公開については131名が入台し、当イベントは盛況のまま終了しました。

オリジナルミニ灯台を制作中



完成したオリジナルミニ灯台

航空機の展示飛行を見上げる来場者

石狩灯台お兄さんとのグリーティング

うみまると石狩灯台お兄さんによる石狩灯台を背景にした記念撮影

↑灯台ライトアップの様子
左から小樽保安部交通課長、石狩灯台お兄さん、小樽保安部次長

灯台パネル展in旭川

留萌海上保安部

留萌海上保安部です。たぶん皆さん「留萌」の読み方も、場所もご存じない方が多いのではないでしょうか。「るもい」と読み、北海道は札幌の北方約１００キロに位置し、日本海に面した所です。留萌はインドの「マドラス」、スコットランドの「ウィック」と並ぶ「世界三大波涛」に数えられており、冬は強風と豪雪で、海は大時化となることが多いです。

さて今年の灯台記念日のイベントは何をしよう。留萌海上保安部には一般公開が可能な灯台は、増毛灯台と天売島灯台があるが、例年、増毛灯台の一般公開は増毛町の春と秋（5月と9月）の味まつりに合わせて開催しており、11月にもなると留萌方面の観光客は望めず、天売島（人口２７０人）の観光客もほぼ皆無。やはり灯台パネル展しかないなと5月頃から構想を練る某課長。

パネル展は、過去にＪＲ留萌駅、図書館で実施してるが、ＪＲは今年3月で廃線、人口1万８０００人の留萌で「図書館にどれだけの人が来るのだろう?」と図書館には無縁の某課長。留萌3年目を迎える某係長曰く、「そんなにはいませんね」。留萌で人の集まる場所は?スーパーしか無いけど、パネル展をするようなスペースは見当たりません…。

さて、昨年、海水浴の事故が一昨年に引き続き発生。事故者は内陸部在住者。海水浴場での安全啓発でも、何処から来たのかを尋ねると9割以上が内陸部在住者。そのほとんどが旭川からでした。

それでは、7月の海開きに合わせて旭川で海水浴の安全啓発をしようと、イオンモールの入口でやらせていただいたところ、さすがは30万都市のイオンモール、次から次へと人が来ます。

と言うことで、パネル展も同じく旭川でやろう！旭川から留萌へは車で1時間半弱、海水浴や釣りに来る方も多く、内陸部でも割と海に馴染みはあるようだし、たまには内陸部で灯台の周知活動も良いのではないかと、旭川イオンモールでの実施を決めました。

さて、パネル展をやるのはいいけど、パネルを展示する掲示板は保安部に無く、イオンでも貸し出しはしておらず、本部まで借りに行くにも北海道、隣の部署で近いと言っても１５０キロ。そもそも本部もパネル

展をやってるし…。

なので展示用物品の調達から開始。掲示板タイプの運搬は大型車が必要なので、最近流行のキャンパスを乗せるイーゼルにA1サイズのパネル額を20組購入し、パネルも一から作り直し。

パネル作りは、その辺りの経験が豊富な某課長。本部、本庁、他管区からも資料や情報を入手し、通常業務の合間を縫って内職に励み、2カ月ほど掛けて完成しました。

今度は某次長。以前、本部時代に機器の換装で取り外し、保安部に保管するよう命じていた300ミリ円筒レンズを探し出し、展示用にきれいに磨き上げました。

パネル展は、11月3日、4日にイオンモールの通路交差部の広くなった場所で開催。展示物の配置は現場合わせ。まずは人通りの一番多そうな角にLED灯器を配置し、点滅の光でお客を誘う作戦。朝10時前の準備段階からパネルを見ていくお客さんに、これは期待できると好感触。11時過ぎるとお客も増え、入庁前に接客のアルバイト経験のある某課長は、色々と声を掛けまくり、後援いただきました燈光会の「のぼれる灯台16」の紹介もしっかり行いました。中には、やはり

写真１　パネル展全景

写真２　重要文化財、デザイン灯台、のぼれる灯台16のパネル

写真３　パネルを見入る見学者

写真４　灯器、レンズの説明をする職員

内陸部、「灯台って、そもそも何ですか?」の質問もちらほら。丁寧に灯台の役目を説明し、そういう方々にも灯台を知ってもらうことができました。記念バッチや灯台ペーパークラフトの配布、特にペーパークラフトは「可愛い」と若い女性にも好印象。ＬＥＤ灯器、３００ミリ円筒レンズ、フレネルレンズ（１本）の展示物にも興味を示す見学者。フレネルレンズは上向きのライトを置き、横から見てもらうことで、レンズの仕組みを理解してもらいました。最終的に、立ち止まって見学していただいた見学者のカウントは16時までに５００人を越え、翌日も５００人越えの２日間で１，０００人越えを達成。稀に見る大盛況で、イオンの担当者からも「ぜひ来年も」との話をいただき、職員もやりがいのあった２日間となりました。

灯台１５５周年記念特別展開催
～期間中16，０００人以上が来館～

第二管区海上保安本部交通部企画課
宮城海上保安部交通課

二管区交通部及び宮城海上保安部交通課は、11月１日から11月７日までの間、宮城県仙台市に所在する仙台うみの杜水族館において、「灯台１５５周年記念特別展」を開催しました。

仙台うみの杜水族館でのイベントはコロナ禍前の令和２年度以降２回目の開催となり、灯台の歴史、役割、東北各地の著名な灯台や航路標識協力団体の活動などをパネル等で紹介したほか、ＬＥＤ灯器、灯台模型の展示や灯台缶バッジガチャガチャを設置して缶バッジの配布等を行いました。

なお、期間中の、11月１日（灯台記念日）及び11月３日から５日の連休中は職員を配置

特別展の状況

灯台パネル（灯台記念日）

し、うみまるを出動させたほか、制服試着のコーナーも設けました。

その結果、多くの来館者がパネルの前で足を止め見学し、航路標識が現在も地域に大きく貢献していることを理解するとともに、子供さん達にも灯台缶バッジガチャガチャを通して、灯台への関心や親しみを抱いていただけたものと思います。

二管区では、今後も灯台記念日行事など様々なイベントを通じて、灯台をはじめ、海上保安業務により一層関心を持って貰えるよう努めていきます。

ガチャガチャチャレンジ中

缶バッジ案内パネル

博物館明治村で灯台記念日関連行事を開催!!
～二つの海の道しるべ「灯台」と「海図」特別企画展示～

第四管区海上保安本部交通部企画課

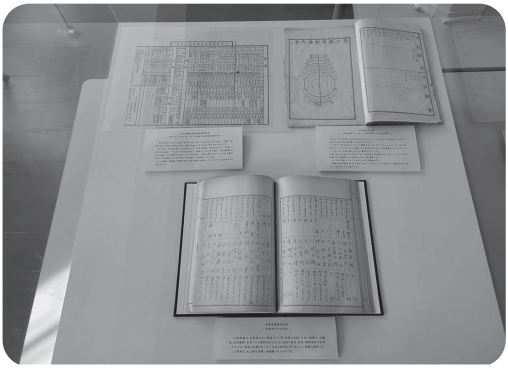
第四管区海上保安本部では、灯台記念日関連イベントとして11月3日から5日の間、博物館明治村において、明治初期から海を照らした「灯台」と船を安全に導いた「海図」の歴史を紹介する企画展示をメインとしたイベントを開催し、3連休と天候にも恵まれ多くの方に来場していただきました。

博物館明治村は、明治建築を保存展示する野外博物館として、愛知県犬山市郊外、入鹿池に面した美しい風景の丘陵地に位置し、ヴェルニ

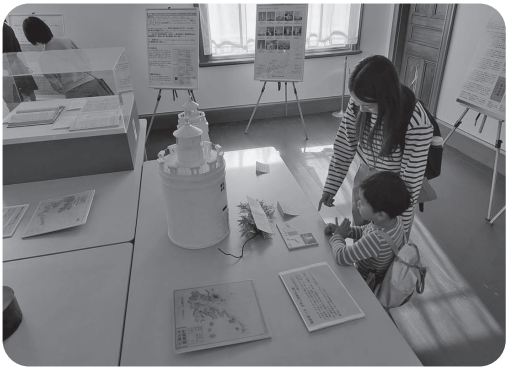
海上保安庁特別企画展示コーナー
（北里研究所本館・医学館２階）

ーにより建設された旧品川燈台や菅島灯台附属官舎のほか、航路標識に関連する施設等が保存展示されています。

菅島灯台附属官舎では『明治の燈台』と題して、ヴェルニーやブラントンによる灯台に関する資料のほか、神島灯台（三重県鳥羽市）で使われていた4等フレネルレンズ等が常設展示されており、このお手伝いしたことが縁となり、例年灯台記念日のイベントに協力をいただいております。



日本燈臺燈船浮標礁標便覧表（左上）
折斜玻璃瑕瑾簿（右上）
安乗埼燈臺経歴簿（下）



150周年を迎えた菅島灯台及び
安乗埼灯台の木工模型

明治６年までに建設された灯台の木工模型

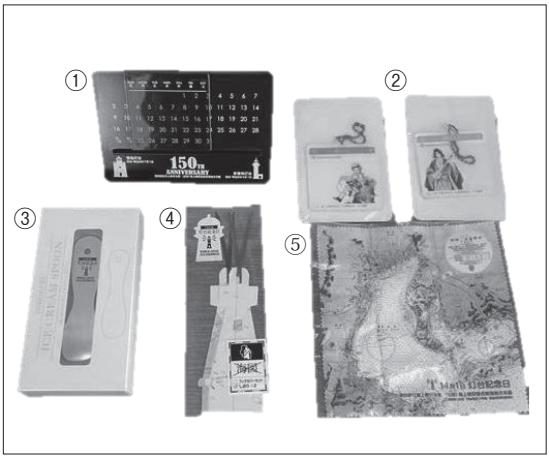
今年は東海地方に洋式灯台（菅島・安乗埼灯台）が誕生してから１５０周年の節目にあたりますが、東海地方で最も古い海図（礫港（三重県南伊勢町））が明治６年に刊行されており、同じく１５０周年となることから海上保安業務の中でも歴史のある「灯台」と「海図」にスポットライトを当てた展示、イベントを企画することとしました。

明治村は東京ドーム約21個分の広大な敷地に、保存

左から石油灯器、石油蒸発白熱灯器、アセチレンガス灯器

フォトスタンプラリー景品交換所
（北里研究所本館・医学館２階）

各入村ゲートで宣伝した
ポスター



① 菅島灯台及び安乗埼灯台150周年記念万年カレンダー
②菅島灯台及び安乗埼灯台擬人化公式グッズ
③灯台記念日記念アイスクリームスプーン
④廃版海図を灯台型に切り抜いた記念しおり
⑤明治26年刊行の海図をプリントしたクリーニングクロス

（公社）燈光会及び（公財）海上保安協会のご協力により作成した景品

展示される建物等が点在しており、如何に入村者を企画展示の会場へ誘導できるかが成否のカギとなります。

今回は気軽に参加できるイベントとして〝フォトスタンプラリー〟を企画しました。村内に点在する航路標識関連施設4か所をスマートフォンなどで写真に収め、これを企画展示室で提示してもらい〝ガチャガチャ〟を回して記念品を差し上げるものです。初めての試みでしたが、入村ゲート付近での宣伝が功を奏し、大勢の方に参加していただき、記念品が足りなくなるではと思うほどの盛況であり、交換後に展示を見ていただくという〝狙い〟が見事に的中しました。

また、企画展示室前の廊下には、明治初期から現代までの測量船と航路標識の変遷を記した全長6メートルに及ぶ年表を敷き、明治の香り漂う中、150年の歴史と技術進歩を確認しながら一歩一歩現代に近づいていき、最終的に展示室に至るといったタイムトラベル的な演出も取り入れました。

3日間で、フォトスタンプラリーに590名の方が参加し、企画展示には1,600名の方の来場者があり、総入村者数が約9,000名でしたので、入村者の5名に1名は企画展示を楽しんでいただいたことになります。7月から進めてきた準備が実を結んだように感じられ、非常に達成感のあるイベントとなりました。

他にもイベントを行いましたが、紙面の関係上、来場された方の声に代えて紹介させていただきます。

○　二つの海の道しるべ「灯台」と「海図」特別企画展示

- 重要文化財に指定されている灯台ってたくさんあるんですね
- 灯台の形ってそれぞれ違うものなんですね
- 昔の海図では名古屋港の形が今と随分違いますね
- 3D海底地形図の迫力すごい！

○　初の試み〝フォトスタンプラリー〟

- 楽しそう！戻って写真を撮ってきます
- 狙ってたアイスクリームスプーンが当たりました！大事に使います！
- （インスタグラム、XなどのSNSに多数の投稿がありました。即日、フリマサイトで販売されていた記念品もありましたが…。）

○　旧品川燈台内部公開

- 毎年、楽しみにしています
- 年に数日しか中に入れないんですか？　ラッキー

です

○　菅島灯台附属官舎常設展示『明治の燈台』ガイドツアー

・灯台の光り方が、それぞれ違うことを知りませんでした

・今までなんとなく灯台を眺めてましたが、見る目が変わりそうです

・150年以上の前のものが現役ってすごいですね

○　海洋少年団による手旗信号実演

・海洋少年団の手旗は何時からですか？（A：明日になります）あら～残念です

・訓練の成果を披露できるので毎年楽しみにしてます（団員）

○　ペーパークラフトを作ってみよう！

・測量船のペーパークラフトいいですね、お手本みたいにうまくできますか？

・さっき上った品川燈台もあるんですか？頑張って作ります！

測量船及び航路標識の変遷

菅島灯台附属官舎常設展示
『明治の燈台』ガイドツアー

海洋少年団による手旗信号実演

・船（のペーパークラフト）カッコいい！帰ってお父さんに作ってもらうー！（子供）

○　海上保安業務紹介、学生募集

・大変なお仕事、ありがとうございます

・リクルートってどこも大変ですよね、がんばってください

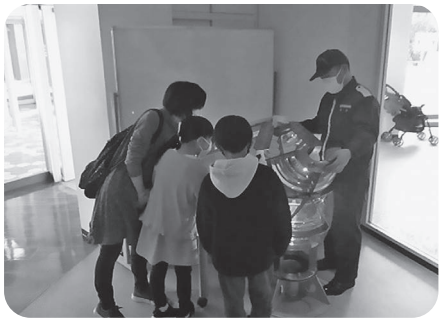
・大卒ですけど入れますか？（A：もちろんです、海上保安大学校初任科もあります）

本州日本海最大級の水族館「マリンピア日本海」での灯台記念日イベント

第九管区海上保安本部交通部

今年で155周年となる灯台記念日を迎えるにあたり、一般の方々に灯台を身近に感じてもらうため、令和5年10月28日(土)、29日(日)に新潟市水族館マリンピア日本海の一角にある「アクアラボ」をお借りして、各種イベントを行い、2日間合計で1，290人もの見学者が訪れる等、各関係者からの多大なご協力もあって、大盛況となりました。

ペーパークラフト展示の様子



灯器の説明

＊パネル、灯器や灯台模型の展示

職員が展示物を見学する来訪者に対し、航路標識の種類や役割を説明し、船舶にとって灯台が安全に航行するために重要かつ欠かせないものであることを知るための絶好の機会となりました。

中には、説明を興味深く聞き入る人や全国の灯台巡りをしたことがある人がいるなど、反応はさまざまでしたが、多くの関心を集めることが出来ました。

＊グッズの配布

航路標識のパンフレット「航路標識のおはなし」

や管内の灯台ペーパークラフトの配布のほか、新たに155周年を記念して作成したウェットティッシュを見学者に配布しました。

小さな子供から大人まで幅広い年齢層の方がペーパークラフトの完成版をみながら、作成意欲を掻き立てられたのか、多くの方が「お家で頑張ってみます！」と意欲的に作成用のペーパークラフトを持ち帰っていました。

今回作成した1，000個のウェットティッシュもシンプルなデザインと使い勝手の良さから大変好評で、準備した数量の大半を配布することができ、灯台をアピールするための一助となりました。

灯台記念日用ウェットティッシュ

クイズ大会の様子

＊ クイズ大会

海上保安庁が監修した「うんこドリル」を使って、小学生以下を対象にした○×クイズ大会を開催しました。海上保安庁マスコットキャラクター「うみまる」の参加もあり、これには子供たちは大喜び！クイズ大会が終わると、うみまると満面の笑みで写真を撮っていました。

笠利埼灯台一般公開　来場者300人突破
～奄美群島日本復帰70周年・155周年灯台記念日～

奄美海上保安部

奄美群島日本復帰70周年となる今年の灯台記念日に、島民の皆様へのこれまでの感謝を込めて、奄美群島最北端にある笠利埼灯台を公開しました。

標高60メートルの灯台からの景色は、前面は青い空に海、背後は奄美の自然豊かな緑が一望出来るだけではなく、遠く喜界島も眺も望める奄美有数の絶景スポ

ットです。

節目となる今年の公開に、より多くの方の来場を期待し、各自治体広報誌・新聞にイベント情報を掲載、地元コミュニティＦＭに出演や島内各所にポスター掲示等で周知した結果、予想を遙かに上回る３１１名の来場者がありました。３００人超えは過去に記録がなく、午前10時から午後３時までの間、人波が途切れなく、奄美群島でその日一番バズった場所であった（であろう）と、対応した職員皆で大成功を喜びました。

来場者は、灯台の歴史、役割について知ると共に、灯台からの絶景を楽しんでいましたが、中には、孫に灯台の役割を自慢げに説明するお爺さんや、「50年ぶりに灯台を訪れたが、昔は灯台まで道路がなく、数キロ手前から歩いて来たんだぞ、知ってるか保安官！」と、若手職員に歴史を語るお父さん。そして何より印象的だったのは、1番目に来場の杖をついたお母さん。受付で灯台までの登りの道のりを説明したところ、「灯台まで山を登れるか不安。」と言いながらも灯台に無事到着。職員もホッとしたのも束の間、「やっぱり灯台の踊場まで上がって景色が見たい。」と、らせん階

段を杖つきながら登り始め、職員が事前説明していた最後の難関である垂直梯子を目の前に、「せっかくだから！」と登る気満々、万全の態勢で職員がサポートし、無事、踊場からの絶景を楽しんでもらう事が出来ました。麓に降り終えたお母さんは「おかげで足が良くなった！杖はもういらん！」と満足そうな笑顔に、「また来年もお待ちしています！」と再会を期待してお見送りしました。

そのほか、制服試着、海保パンフレット・ペーパークラフト等配布コーナーを設け、多くの方に海上保安庁をＰＲする事が出来ました。

また海上保安協会奄美支部のご協力により、日本復帰「70」周年や海のもしもは「１１８」番、「１５５」周年灯台記念日等の数字に関係した来場者（７０、１１８、１５５番目等）に記念品を贈呈、更に喜んでいただけました。

奄美海上保安部は、地域の皆様との絆を大切に、安全安心に努めます。

本イベントに関し、ご支援頂きました(公社)燈光会及び(公財)海上保安協会奄美支部に深く感謝いたします。

残波岬灯台で海のお仕事・職場体験
～それ行け！未来の灯台守～

第十一管区海上保安本部

晴天に恵まれた11月3日(金)、第十一管区海上保安本部は、１５５年目の灯台記念日に合わせた新たな試みとして、未来の灯台守を確保するため、県内の専門学校生等11名に対して、残波岬灯台のメンテナンスの職場体験を行いました。

【海上保安官による灯器室でのメンテナンス方法の説明】

4グループに分かれた参加者は、普段は入ることができない灯器室等におけるランプの使用時間確認やバッテリー電圧測定等のメンテナンス体験、航路標識の役割の説明を受け、当庁の海上交通業務への理解を深めてもらいました。

参加者からは、「海上保安庁が灯台のメンテナンスをしているのは知らなかった。海上交通業務に興味を持った。」とのコメントがあり、充実した職場体験となりました。

【集合写真】

155周年灯台記念日祝賀会開催

燈光会事務局

令和5年11月6日(金)、155周年灯台記念日祝賀会をKKRホテル東京10階「瑞宝」において開催いたしました。

灯台記念日祝賀会は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、令和元年度の151周年以降、開催見合わせとなっていましたが、同感染症の5類感染症への位置づけ変更等を踏まえ、4年ぶりに開催することができました。

祝賀会は、定刻の18時30分に燈光会三宅専務理事の司会により始まり、次の式次第に従って進行いたしました。

一　開会
二　燈光会会長挨拶
三　海上保安庁長官祝辞
四　来賓紹介
五　乾杯
六　懇談
七　「喜びも悲しみも幾歳月」合唱
八　燈光会副会長挨拶
九　閉会

開会の後、先ず、岩崎貞二燈光会会長から冒頭にご出席いただいた方々への謝辞が述べられ、近年、灯台が重要文化財に指定されるなど灯台が持つ価値に社会の関心が集まっていることを踏まえ、燈光会としても海上保安庁、地元自治体等の関係機関の皆様と協力、連携して、灯台を盛り上げていきたいとの挨拶がありました。

続いて、石井昌平海上保安庁長官からご祝辞をいただきました。

石井長官からは、燈光会の航路標識事業の周知啓蒙活動に対する感謝の意が述べられるとともに、今後とも海上交通の安全のために、関係者の皆様と連携して、

航路標識事業を推進していく旨のご挨拶があり、また、燈光会が毎年、灯台記念日の行事として実施している灯台絵画コンテストについても触れられ、若い世代に、灯台について関心を持っていただく大変良い機会であるとのお言葉をいただきました。

次に、公務ご多忙の折、ご来賓としてご出席いただいた文部科学大臣盛山正仁衆議院議員はじめ、北川一雄衆議院議員、江島潔参議院議員、赤池誠章参議院議員及び大野泰正参議院議員にそれぞれご登壇いただき、ご祝辞をいただきました。

写真1 燈光会会長挨拶

各国会議員の皆様からは、地元の灯台に関するお話や海洋国家として灯台の持つ役割の重要性と、その灯台を造り、守ってきた職員に対する敬意のお言葉が述べられました。

写真2 海上保安庁長官祝辞

元衆議院議長の故田村元先生が旗振り役となった灯台応援団「おでんの会」の話題も登場するなど、灯台記念日らしい和やかな雰囲気でのご挨拶をいただきました。

ご本人のご出席が叶わなかった西村明宏衆議院議員、御法川信英衆議院議員、鈴木馨祐衆議院議員、泉田裕彦衆議院議員及び阿達雅志参議院議員につきましては代理の方々、そして今回初めてご出席いただきました石井裕南房総市長のご出席をご紹介させていただくとともに、赤羽一嘉衆議院議員、室井邦彦参議院議員及び上地克明横須賀市長からいただいた祝電（メッセージ）を披露させていただきました。

乾杯の前に、燈光会が、灯台記念日の行事の一環として、海上保安庁のご後援をいただき、小中学生を対象として実施した本年度の「灯台絵画コンテスト２０２３」において、応募総数９９１点の中から選ばれた特に優秀な金賞以上の６作品について、会場内で展示していることをご紹介いたし

ました。

そしてプログラムは懇談会へと進み、君塚秀喜海上保安庁交通部長にご挨拶と乾杯のご発声をお願いし、ご登壇いただきました。

君塚交通部長からは、海上保安庁灯台部時代から引き継がれてきた灯台記念日祝賀会の伝統に触れられ、今後とも、関係皆様のご支援の下、航路標識事業に取り組んで参りたいとのご挨拶があり、そして乾杯のご発声をいただきました。

写真３：文部科学大臣盛山正仁衆議院議員

これに出席者一同が唱和して、祝宴が始まりました。

会場では、これまで燈光会一般会員の丸山胤幸様からご提供いただいた灯台の空撮映像をＢＧＶとして放映させていただき、祝賀会に華を添えさせていただきました。

会場には時間の経過とともに出席者の方々の輪があちこちに広がり、思い出話に花を咲かせる姿や、熱心に絵画コンテストの作品をご覧になり、記念写真を撮るなど微笑ましい光景が繰り広げられていました。

祝宴が盛り上がる中、松原　仁衆議院議員が公務ご多忙の中駆け付けていただきましたので、壇上にてご祝辞をいただきました。

会場和やかなうちに本祝賀会は終わりに近づき、恒例のエンディングソング「喜びも悲しみも幾歳月」の合唱へと移りました。

正面のスクリーンに、燈光会が参観事業を行っている16か所の「のぼれる灯台」の映像が映し出される中でイントロが流れ、（株）エイフォース・エンタテイメント所属の歌手田山ひろしさんのリードにより歌がスタートしました。1番を田山さんが、2番からは田山さんからご指名を受けた方を含め全員で合唱、終わりは田山さんと全員合唱で灯台記念日らしい締めくくりとなりました。

終わりに、最後の盛り上がりを受け、上野紘燈光会副会長の閉会の挨拶で祝宴は幕を下ろしました。

今回４年ぶりの開催となり、出席される方の減少が心配されましたが、約１５０名の方にご出席をいただき、盛会裏に終えることが出来ました。

近年、燈光会会員において、一般会員や賛助会員が増えてきていますが、今回、そうした会員の皆様にも多数ご出席いただき、灯台記念日のすそ野が広がっていることを実感した祝賀会でもありました。

新型コロナウイルス感染症の影響により、燈光会も大変厳しい状況にありましたが、ようやく回復傾向となり、こうして灯台記念日祝賀会を開催し、皆様とお祝いすることができ、感無量です。

これもひとえに祝賀会の準備段階からご支援・ご協力いただいた海上保安庁の皆さまのお蔭と感謝しております。ここに誌面をお借りしてお礼申し上げます。

写真４：絵画コンテスト作品展示

写真５：「喜びも悲しみも幾歳月」

写真６：上野燈光会副会長挨拶

秀嶺青葉を背においてー なつかしの母校へ旅するー

普通会員　鷹見哲郎

＊1年越しの母校再訪計画

2023年9月、私はなつかしの母校、舞鶴の海上保安学校の正門前に立った（写真1）。海からの風が心地よく通り抜けていく。正門から本館へまっすぐ延びる道、その先の本館建物を前にして、なつかしさがこみ上げてくる。

写真1　卒業式前日、舞鶴に到着し正門前に立った

私はこの夏、91才となった。記録的な猛暑の影響もあり、近頃の私の行動範囲はかなり限定されたものになっている。しかし、片道約800キロ離れた塩釜から、思い切って舞鶴まで来たのには大きな理由があった。それは、孫娘の卒業式である。孫は9月24日、海上保安学校62期生として主計コースを卒業し、第2管区に赴任することが決まった。是非その門出に際し、自ら舞鶴に出向いて、おめでとうのひと言を伝えたかったのだ。

写真2　昔と変わらない美しい山々をバックにした海上保安学校

実をいうと、私は1年前の2022年10月に、海上保安学校（写真2）で学び始める孫の入学式に出席する計画をたてていた。しかしながら、私をいつも支えてくれている妻が同年1月、大腿骨を骨

折し入院。その後のリハビリも続いていて、とても行ける状況ではなかった。それでも私は、同年7月、私の初任地である尻屋埼灯台を、孫と一緒に訪れる機会を許された（その時の訪問記は『燈光』令和4年9月号に記した）。尻屋埼灯台の回廊で、「じっち、来れてよかったね」と言ってくれた孫が、私の母校、海上保安学校を無事卒業し、しかも主計コースの代表として卒業証書を受領するという。これはなんとしてでも舞鶴に行くしかない。

さて、行くとは決めたものの、どうやって行くかが問題だった。最初に検討したのは鉄道だった。仙台まで在来線、そして東北新幹線、東海道新幹線と乗り継ぎ、京都から特急に乗り換え、東舞鶴まで行くのが時間的に効率のいい交通手段である。しかしながら、長女と妻が塩釜から同行してくれるとはいえ、つえをついてゆっくりゆっくり歩く身にとっては、円安で外国からの旅行者で「超」ごった返す東京駅、京都駅での乗り換えには、自信が持てなかった。そこで鉄道を使わず、仙台から名古屋までフェリーで行き、名古屋港から愛知県在住の次女の車に乗って舞鶴に行く案を検討した。しかし、海が荒れた場合、フェリー内で、つえが欠かせない妻と2人そろって転倒し、骨折でもしたら、卒業式にたどりつけなくなる可能性もある。結局、3人の子どもたちがＬＩＮＥ上で相談してくれ、次女が名古屋からフェリーで車を塩釜まで運び、全行程を車で行くという案に落ち着いた。結果的に、約50年ぶりに家族5人（91才、83才、61才、59才、56才の平均年齢70才！）が揃い、塩釜から舞鶴までの往復1600キロ、余裕をもって帰りには片山津温泉で1泊という2泊3日のロングドライブ旅行の計画ができあがった。実に嬉しい事であった。念のため主治医に相談すると「行ってらっしゃい、行ってらっしゃい」と言ってくれた。妻は介護用品のレンタル業者から車いすを1週間借りる手続きをしてくれ、万が一に備えた。

＊室戸埼で灯台守を志す
―森台長との出会い―

私が灯台守になるために、海上保安学校に入学したきっかけは、室戸埼灯台での森台長との出会いにさかのぼる。

私は昭和7年7月、岐阜県阿木村の農家の次男として生まれた。私の出産に助産師は間に合わず、祖母のイトが取り上げてくれた。イトばあさんは小学校しか出ていなかったが何でも知っていて、私に大小の月、

数の数え方などいろいろと教えてくれた。私は家から片道4キロメートル離れた阿木村立尋常小学校（途中で阿木村立国民学校に改称）まで毎日歩いて通い、国民学校高等科には進まず、中学入試を受けて昭和20年、旧制中津中学校（終戦後に中津女学校と統合）に入学した。私が当時使った明智線は既に廃線となっている。私が中学を卒業した昭和23年は、まだまだ敗戦の混乱が続いていた。私は戦後日本の復興に貢献したいと思い、中津工業高校の土木課に進路を決めた。卒業を前にした昭和26年、高校の恩師・石黒広平先生に勧められ、公務員試験を受けることにした。その面接時に、「君は土木をやっていたのか。それだったら、室戸岬の現場に行ってほしい」と言われ、昭和26年の春、室戸埼灯台に併設される無線方位信号所建築の現場監督として赴任することになった。

当時の室戸埼灯台の台長は森貞好（ていこう）さんだった。当時の室戸埼灯台は、ご近所の室戸測候所の30人体制に比べると、3人体制（台長以下、我々技術員2人）と、ずいぶんとこぢんまりとしていたが、私はあたたかな灯台の職場の雰囲気がすぐに好きになった。森さんは横浜の燈台官吏養成所を出られた方で、通信士の資格も持っておられた。奥様と娘さん2人で生活しておられた森さんは、「たんぱく質をしっかりとりなさい。毎日卵を産んでくれますから」と、自らひよこから育てたニワトリを1羽譲って下さった。私は鶏小屋を作って、毎日世話をし、こづかい帳（写真3）に鶏が産んだ卵の数も記録していった。私のニワトリは2～3度、キツネにやられたが、森さんはその度に、新たなニワトリを譲って下さった。食事もよくご馳走になった。家族と共に、誇りをもって働く森さんの姿を見て、私は灯台守の仕事に憧れを抱くようになった。大きな海を見渡せる風光明媚な職場環境で働きたいと思うようになった。

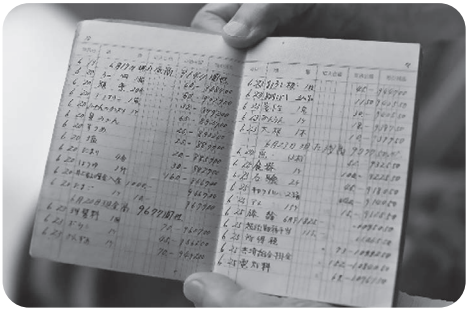


写真3　室戸埼灯台勤務で日々つけた家計帳

戦後の混乱期がまだ続く当時は、今と比べて圧倒的に食糧難の時代で「食べること」が何よりも大事なことであった。そのような時期の昭和26年、東京、横浜、茅ヶ崎の3か所に分散していた海上保安学校が舞鶴に移設、統合し、三位一体の教

育体制が確立した。「月給をもらいながら、飯を食わしてもらって、しかも勉強ができる」、「恩給（年金）がつく仕事につける。とてもいい学校ができた」という評判は、室戸まで伝わってきていた。私は森台長の勧めもあり、もう1人の技術員、井上さん（高知出身の方で、室戸高時代に相撲部に所属していたこともある体格のいい方だった）と神戸まで入学試験を受けに行った。私は海上保安学校、井上さんは呉の海上保安大学校の試験を受けた。面接では「君はどうして海上保安庁の試験を受けたいのかね？」と質問された。私は「はい、勉強して日本の役に立ちたいと思います」と答えるのがやっとだった。私は緊張していた。

試験の結果は当日のうちにでて、2人そろって不合格だった。井上さんは神戸に残り（井上さんは結局、室戸には戻ってこなかった）、私は当直勤務のため、神戸～小松島（船）、小松島～室戸（バス）で室戸に戻り、2人の結果を森さんに報告した。すると森さんは「それは残念でしたね。でも君には熱意があるから是非、灯台で働きなさい。海上保安学校には現場推薦枠があるから」とおっしゃって下さり、推薦の手続きをとってくれた。

そんな思い出深い室戸埼灯台には退職後、妻と再訪した。当時と違って今は街からでも光が見えるように光を遮る遮蔽板が外されているため1等レンズがよくみえた。私は灯台の前にたたずみ、かつて石油で灯をともし、分銅を使って回転させていた当時を鮮やかに思い出すことができた。石造りの宿舎の屋根は外されていたが、宿舎の石組み、無線方位信号所の建物は当時のまま残っていた。私は森台長から昭和27年3月、当時頂いたはなむけの言葉を今でも鮮明に覚えている。「灯台のこと、これからも一生懸命やりなさい。体にはくれぐれも気をつけなさい」。

森さん家族に見送られて室戸埼灯台を後にした私は、岐阜の実家に立ち寄り、海上保安学校がある舞鶴の地におりたった。灯台科2期生、その時私は20才だった。

＊当時の海上保安学校時代の思い出

最近、民放で人気タレントが海上保安学校へ体験入学をするという内容の番組が放映された。家族と一緒に私も見たが、最近の学校生活の様子がとてもわかりやすく編集されていた。朝6時半の起床整列、海上保安体操、5キロメートルの遠泳、行軍訓練、短艇訓練といった内容は昔と変わっていなかった。私は特に海上保安体操が今なお、続いていることに感動した。こ

の体操は当時、教官から海軍から引き継いだと説明をうけた。

私たちが入学した当時と比べ、現在の学生たちの住環境はずいぶんとよくなったようだ。我々が当時生活していた建物は、海軍防備隊が使っていた木造バラックで、私物を収納できる個人用の机などはなく、講堂のような広い部屋に、パイプ製の2段ベッドがずらりと並んでいるだけだった。冬は部屋にだるまストーブが2つあるのみで、支給された1枚の毛布をくるんでもまだまだ寒かった。食事はご飯（時にはタイ米）と汁物のみだったが、休日も含め、朝昼晩3食出してくれたのでとても有り難かった記憶がある。現在では温水プールがあって年中泳ぐことのできる環境がそろい、またバディを組んで互いに励まし合いながら泳ぐ技術を向上させているという。誠に素晴らしいと思った。あの当時、泳ぎの苦手な学生は赤い帽子をかぶらされ、学校前の海で徹底的に泳ぎをたたき込まれていた。私は阿木の川で泳ぎを自然と身につけていたため、海は川と違って、体が浮いてなんと泳ぎやすいことかと思っていた。

舞鶴時代、楽しかったことといえば、土日の外出（タクシーではなく、基本歩いて町まで出た）時にどんぶりで食べたぜんざいだった。値段は70円くらいだったように思う。当時の舞鶴の港には、シベリア抑留がまだ続いており、引き揚げ船が係留されていた。そんな外出したある日、舞鶴の街で、偶然にも阿木の小学校の同級生、稲垣宏君に会ったのには本当にびっくりした。稲垣君は昭和27年4月に発足した海上警備隊の養成機関で教育を受けるため舞鶴へ来ていたのだった。

写真4　海上保安学校に派遣され練習船として任務に就く「みうら」

私が入学した当時は、特修、燈台、水路科（教育期間1年）、航海、機関、通信、主計及び看護科（教育期間半年）があった。燈台科は昭和47年に教育課程が2年となったが、当時は1年で全てを学んでいた。燈台科2期生は80人（2期生の最初の同期会の開催地はむろん舞鶴が選ばれた。幹事は柴田さん、堀田さん、西さんが担当した。その後、我々は隔年で長崎、松島、岐阜、広島、北海道、千葉、神奈川、三重、神戸、東京、金沢などで旧交を温めてきた）。舞鶴での学びの中で今でも印象に残っている授業がある。それは、野沢源

右衛門先生が担当して下さった気象学である。当時40代の先生は後に呉の大学校へと移られたが、野沢先生はとてもユーモアもあり、気象学の合間に、「諸君、一番寒いときに寝る秘訣は、なんと言ってもお酒をぐいっと飲んで寝る！それにつきる」などとおっしゃっていた。実際、成人前の学生がほとんどだったのでそんなことも出来ず、先生流のジョークにずいぶんとその場は和んだ。先生は希望者に時間外に数学を教えて下さっていた。

＊舞鶴に向けて出発、孫とツーショット写真

２０２３年９月23日、卒業式の前日、私たちは連休の渋滞を避けるため、午前３時半に塩釜から出発することにした（写真５）。しかしながら、旅を前にそわそわしていたのだろう。午前２時前には皆起き出して、あっという間に準備が完了した。そこで１時間早めて午前２時半に出発することにした。私と妻は中央のゆったりとした席で、とても快適に過ごした。次女と長男は、トイレ休憩を兼ね、数時間毎にサービスエリアで運転を交代しながら、順調に舞鶴を目指した。

舞鶴東インターチェンジを降りたのは午後１時過ぎ。今回、孫の卒業式に立ち会うこと以外に、私には大きな目的が一つあった。それは思い出の服を着て孫と一緒に母校の正門前で写真を撮ることだ。私は、舞鶴への旅が具体化してから、早速、妻に思い出の服を直してもらうことにした。何十年ぶりかに出してもらって試着した思い出の服はとても小さかった！私の横幅が大きくなっていたからだ。とても着られないので、裁縫の得意な妻が上着、ズボンの中央部分をほどき、幅をだしてくれた。そして今の体型でも、正面から見れば何の不自然もない（但し、背中から見られるのは

写真５　舞鶴へ旅する朝。孫が高校生時書いた“努力あるのみ”の字は今も私のリハビリの励みになっている

写真６　卒業式当日は、全国から多数の父兄が舞鶴に集った

NG）「特注服」に仕立て直してくれた。

9月23日は秋分の日で学校も休みだった。孫は卒業式前なので、もしかしたらお友達と舞鶴の街に出ているかもとしれないと言っていたが、インフルエンザが校内で流行したため学生たちは外出自粛となっていた。昼過ぎ、孫娘は正門前で待ってくれていた。時折、教員の車が出入りする度に門の開閉をてきぱきと笑顔で応対していた（写真7）。日々の鍛錬を通じて、孫はずいぶんとたくましくなったように見えた。私は、はやる気持ちを抑えながら、同行してくれた2人の娘に着替えを手伝ってもらった。思い出の服に着替えた私はつえをつきながら、紅白の幕が飾られた正門の前に立った。昔の正門はレンガ造りではなかったように記憶する。当時、鉄製の門の所には警備員が常駐し、分団名と名前（私は水路科と燈台科が合同した第4分隊の第4班に属していた）を申告して入ったものだ。そんなことを思い出しながら、私は孫との写真撮影に臨んだ。私と一緒に写真に納まる孫は、卒業式を翌日に控え、実に晴れやかな笑顔を見せていた（写真8）。この日一緒に撮った敬礼写真は、私にとって今回の旅のハイライトでもあり、生涯忘れられない宝物となり、現在居間に飾っている。

その日、私たち家族は学校から5キロメートル、車で10分ほどの位置にある「ホテルアマービレ舞鶴」（写真9）に宿をとった。旅の疲れをとるため昼寝をしてそれから、海上保安学校の学生、教職員御用達の中華料理「梅乃家」（写真10）の名物料理の数々（名物の天津飯、あんかけ焼きそば、酢豚、餃子、たっぷり入った唐揚げはなんと¥670！）をテイクアウトして頂いた。どれもボリュームがあり美味だった。梅乃家の主人は「学生さんとお別れのあいさつをしたかったのですが、（インフルエンザで）外出

写真7　正門前の開閉を行う孫

写真8　海上保安官として歩みを始める孫と

禁止になってしまって」と、とても残念そうに話していた。

＊卒業式当日、校歌を一緒に歌う

そしていよいよ卒業式当日を迎えた（写真11）。心配した天気も快晴となった。当日は海上保安庁を管轄する国土交通大臣も出席するということで、海と空からは万全な警備態勢がとられ、地上ではＳＰが警護を固めていた。我々も、駐車場で手荷物検査を受け、校内に入場した。午前８時すぎ、幹部出迎えのため、学生・教職員が次々と校舎から出てきて、校門から１分隊、２分隊～13分隊まで真っ直ぐに整列した（写真12）。

学生たちは、午前８時25分から石井・海上保安庁長官を出迎え、同35分には斉藤・国土交通大臣を出迎えた。そして９時５分から私たち家族が楽しみにしている学生の隊列行進が始まった。卒業式に出席するため全国から駆けつけた家族は、受付でもらった「分隊早

写真９　「ホテルアマービレ舞鶴」はバリアフリーでスタッフも親切ないい宿であった

写真10　職員、学生御用達の中華料理店「梅乃家」。ボリューム満点で美味しい料理で有名だ

写真11　舞鶴の街に掲げられる中舞鶴親睦会の歓迎幕が私たちを迎えてくれた

写真12　幹部出迎えでずらりと並んだ学生たち

見表」を見ながら、学生たちの雄姿を見守った。第1分隊の赤、第2分隊の茶…第13分隊の白まで、どの学生も背筋をピンと伸ばし次々と前を通り過ぎていく（写真13）。我が子以外の学生たちの姿を見ても、感動しているのだろう、目頭をハンカチでおさえる親御さんもずいぶんとおられた。

孫は学生音楽隊に任命され、テナーサックスを担当していたため、隊列行進での雄姿を見ることはできなかったが、演奏前、遠くから笑顔でこちらに手をふってくれて安心した。孫の周りの音楽隊には女子学生が多かった。私が入学した当時、女子学生は皆無だった。資料によると、初めて女性学生が入学したのは昭和54年。そこから44年がたち、今回の62期生192名のうち20名は女性だった。その内訳は、航海コースは91名のうち5名、機関コース42名のうち1名、主計コース59名のうち14名である。

写真13　家族、関係者を前に披露された隊列行進

写真14　卒業式の式次第

隊列行進が終わると、我々は講堂に移動した（写真14）。但し、講堂に入れるのは一家族1名のため、妻、娘たちは別室でライブ中継を見守った。午前9時40分、卒業式典が始まった。カッ、カッ、カッ。式典の最初は、規則正しい足音を響かせながら、学生代表3人による校旗入場だった。我々の学生時にはなかったものだ。孫によると、この3人は、とりわけ優秀で、選抜された学生とのこと、式の始まりにふさわしい、きびきびとした動きがとても印象的だった。私は、真ん中の男子学生の旗手を挟む、前衛、後衛の2人が女子学生だったことに、これからは優秀な女性が今の海上保安庁を支える大切な存在になっていることを改めて認識した。

開式の辞、国歌斉唱と続き、いよいよ卒業証書授与となった。航海コース、機関コース、主計コースの順で1人1人が名前を呼ばれ、起立していく。講堂に響

く若き海上保安官の声に、こちらの背筋もぴんとする思いだ。コース毎に全員が呼ばれ、そのコースの代表が壇上にあがって卒業証書を授与される。孫は主計コースの代表だった。主計コースは3コースの最後だったので、孫の名前が呼ばれるまでの間、私も次か次かと緊張感を楽しんだ。「…以上59名、代表、鷹見あき！」「はい！」孫の大きな声は、最後列に座っていた私まではっきりと聞こえてきた。背筋を伸ばして壇上に上り、きびきびと卒業証書をもらう一部始終を、私はしっかりとまぶたに焼き付けた。

写真15　卒業生に向けて式辞、訓示がされた

川上・海上保安学校長は式辞で言った（写真15）。「諸君は…困難で過酷な教育訓練を見事に乗り越え、知識技能を修得し…仲間と協力して困難を克服する術を身につけ、人としても大きな成長を遂げた…本日は諸君が海上保安官として、全国各地へ羽ばたいていく晴れの門出の日…如何なる困難も、海上保安官同士の強固な団結のもとでしっかり乗り切ってほしい」。続く石井・海上保安庁長官は訓示で、海上保安官が受け継いできた「正義仁愛」の精神について言及、斉藤・国土交通大臣は、「卒業生の皆さん。本日、皆さんの端正な所作、はつらつとした声、そして一人ひとりの自信に満ちあふれた眼差しを拝見し、海上保安庁を所轄する大臣として、大変誇らしく、頼もしさを感じています」と祝辞で述べた（写真16）。これらの訓示、祝辞に対する卒業生答辞も素晴らしかった。総代の大久保君は力強い声で答えた。「…誰かに見られていなくても丁寧な行動を毎日、きちんと自分の中で習慣づけていけば、いつの日か自信と周りからの信頼を得ることができると学びました。こうした日常の積み重ねが我々を大きく成長させ、海上保安官になるという揺るぎない信念を持ち、奮闘努力を続けることができました…」。その決意を聞いて私は胸が熱くなった。そして私は確信した。海上保安官としての誇り、正義仁愛は

写真16　祝辞を述べる斉藤国土交通大臣

今も確実に若い世代に脈々と受け継がれていると。

式典の最後は校歌斉唱だった。卒業後、70年以上たってはいたが、不思議と私の口からは歌詞がすらすらと出てきた。

秀麗青葉を背において
白糸湾の潮の香に
むせぶ吾等が学舎は
海の護りに競いたつ
若人つどう　ああ海上保安学校

朝におさめし文の道
培う技のたくましく
夕べたのしき語らいは
これ仁、これ智、これ力
若さ漲る　ああ海上保安学校

明日の現地の活躍を
夢みる頭上にひるがえる
庁旗ぞ吾等が旗印
進め若人　海は呼ぶ
希望果なし　ああ海上保安学校

孫と一緒に母校の校歌を歌えるとは何という喜び、何という恵みであろう。はるばる塩釜から来ることができて本当によかった。私は、この式が終わり次第、舞鶴からそれぞれの現場に旅立つ（写真17）192名の一人一人に、かつての私自身と同僚の姿を重ねながら、心からエールをおくった。今度は孫が働く巡視船の一般公開時に激励に行くのを目標に、日々のリハビリを続けていきたいと思っている。

写真17　在校生に向かって帽子を振って別れを告げる卒業生

写真18　家族皆との舞鶴旅は良い思い出となった

―明治の灯台の話(73)―

角島灯台（前編）

灯台研究生
森川親方と夢崎明神

角島は山口県の北西、下関市豊北(ほうほく)町の沖に浮かぶ周囲約17キロメートルの島です。平成12（2000）年に角島大橋が開通し、その雄大な姿が近年インスタ映えすると話題になり、多くの観光客が訪れています。この島の北西端に角島灯台があります。点灯開始は明治9（1876）年3月1日、日本海で最初に建設された灯台です。灯台設置の理由は、国立公文書館保管の明治6年の公文録「角島ニ灯台建築伺」に次のとおり見られます。

図―1　角島灯台位置図

一　角島　長門國大浦郡
右ハ　長門海中　西北間ニ孤立セル小島ニシテ　馬関ヨリ北海へ航スルノ船舶ハ皆　此島岬ヲ標的トシテ磁鐵(鉄)ヲ定ム　然ニ其ノ四邊暗礁多ク常ニ逆浪ヲ起ス故ニ　風雨ノ夜等ハ　航海者ノ危難少ナカラズ　最緊要ノ場所ニ付　當省定額ノ内ヲ以テ　適宜ノ燈臺御建築相成候様致度　此段相伺候也
明治六年二月七日　工部大輔　山尾庸三
正院御中

最初期の日本の灯台は、江戸協約（改税約書）の第十一条に基づく欧米との交易のための外航船の通航ルート上に作られていきましたが、この頃には既に和船が行き交う航路上にも、国内から洋式灯台の設置が求められていました。
この要望書から半年後の明治6（1873）年8月

13日に角島灯台の工事が始められました。国立公文書館所蔵明治8年の工部省考課状にある燈台寮の報告書には、工事開始2年後の角島灯台の状況が次のとおり報告されています。

一　長門國豊浦郡角島燈臺建築ノ儀　明治六年二月伺済　同八月十三日起工　日数凡四百五十日ヲ経テ昨七年十一月上旬成功見込ノ處　六年七年中ノ工程五分五厘ニシテ　其実況ハ前両年考課状ニ開陳ス以後本年六月迄八分五厘余ノ工程ニテ　本年十二月ヲ全ク落成ノ期トス　此役ヲ擔當スル中属福本重威此役ニ関スル少手心得森川重徳　技術ニ等見習下級井済直孝　英人ヲーストレル合四名也

角島灯台の工事は、明治7年11月の完成予定から大幅に遅延していたようです。その理由が書かれた明治6～7年の考課状は残念ながら残されていませんが、角島灯台の建設工事秘話が、工事に従事した島民の回顧談「角島燈臺建設ローマンス」（燈光昭和3年4月号掲載）に次のとおり見られます。

古老より聞きたる建設物語を左に紹介す。

あの燈臺の建ったのは俺の若い時であった。日雇四銭呉れるといふので喜んで通ったものだ。毛唐は時計と云ふもので時刻を計るから、遅刻すると罰金だと聞かされて、そんなものがあるかなあと目を丸くしたものだ。

親方の命令で毎日穴を掘ったが、やがて十間四面位の穴が出来て、基礎石を埋込むと云ふのだが、明神様の萬方（まんぽうとは燈臺より数丁海岸にある明神様周囲の乱石積（の積み石））を投込むと云ふことだ。俺共は神罰の恐ろしきことを力説したが、森川親方は素朴な俺共の傳説を信ずることの出来ない文化人だった。そんな馬鹿なことがあるかと一蹴され、血気な石工が雷同して、俺共に明日からやらせる事にしてしまった。さあ大変だ。俺共は晩方寄々協議したが、名案の出よう筈もない。やらなければ四銭の日傭を棒に振らなければならないし、やれば神罰が恐ろしい。をまけに嬶共まで騒ぐので、やらないことにきめたが、その夜半から凄惨な風雨の大時化！建築小屋は影も形もなく吹き飛ばされ、穴は埋まってしまった。俺共は神秘を恐れ戦いた。

翌日森川親方の處へ罷り出て、不敬の行為に対する神の祟りだと口々に申入れたが、剛膽な親方は笑って

聞き入れない。やむなく仕事を断るとそれでは親方が困ると云ふ。そんなことのあるまじきことを反復説明して呉れたが、堅く信じて居る俺共をどうする事も出来なかった。遂に神意を伺ふこと、なり、可否を夢知らせに待つことにした。處が其の晩、大蛇が小蛇を連れ親方の枕元に立ち、怒れる眼もの凄く　住ひを取り拂われては路頭に迷ふから、断じて燈臺は落成させない　と云ひ残して立ち去った。目が醒めて夢と知ったが、その恐怖にさすがの森川親方も生きた心地もなく、翌日は神饌を供へ萬方を取らないことは無論のこと、燈臺落成の上は、石の鳥居を寄進すると誓願し、無事落成、あの鳥居を寄進したのだ。それから誰云ふとなく、西北の暴風を森川風と云ふ様になった。

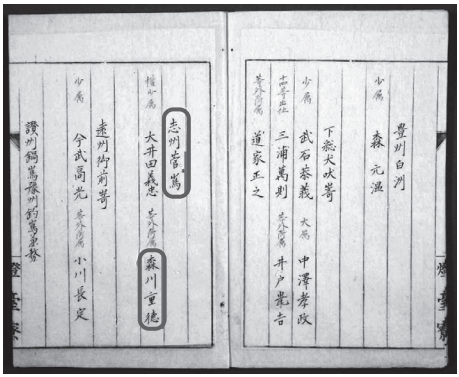
令和の現在、角島で北西の風を森川風と呼ぶ俗称は残されていませんが、角島灯台すぐそばの海岸には今も、乱積みの石の囲いと鳥居（図２）がある夢崎明神と称する祠があります。鳥居は乱積みの石とは異なる角島灯台と同じ花崗岩で作られており、よく見ると、明治八年亥四月、奉寄進、石工〇〇、大工〇〇、尾山〇連中の文字が彫られています。鳥居が建てられた明治８年４月は、灯台はまだ工事中ですが、灯籠の取り付け完了までを竣工と考慮すれば、明治８年６月に85パーセント出来ていた考課状の報告に照らし合わせると、角島灯台の石積みの灯塔の工事をほぼ終えた頃に、この鳥居が寄進されたものと推測できます。

角島灯台の工事で森川親方と呼ばれていた燈台寮少手心得森川重徳は、早稲田大学図書館所蔵大隈文書の燈台寮建築事務摘要にある出張官員の記録の中で菅島

図－２　夢崎明神の鳥居と乱積みの囲い
（令和４年12月撮影）

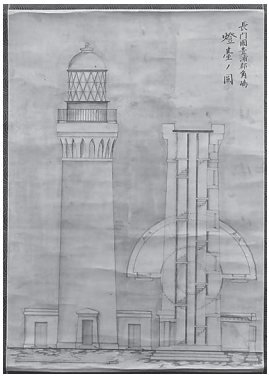
灯台の工事にも携わっていたことが確認できます（図3丸印）。菅島灯台は、ブラントンの最初のレンガ灯台です。灯台の完成は、点灯開始と同じ明治6年7月です。同月に、菅島灯台のレンガ職人竹内仙太郎が、燈台寮から角島灯台への出張辞令を受けています（図4）。角島灯台工事開始の一ヶ月前です。角島灯台は、花崗岩で見事に作り上げられたブラントンの石造灯台として有名ですが、退息所や倉庫はレンガ造で、石造とレンガ造が併用されているブラントンの他の灯台には見られない特徴があります。レンガは、角島灯台の内部にも使われています。漆喰や羽目板で覆われているため外からは分かりませんが、分銅筒とらせん階段の内壁がレンガで建造されています。角島灯台は石造とレンガ造が混在している灯台です。石とレンガが混在する灯台は、同じ日本海側の出雲日御碕灯台があります。出雲の場合はレンガ造の内壁は重厚な構造ですが、角島のレンガ壁は下関市の調査資料によれば、17センチメートルという極端に薄い壁厚です。石造灯台内部で強度や耐久性が劣るレンガの薄い壁をなぜ採用したのかは不明です。角島灯台の古い彩色図（図5）にも、内壁のレンガが明確に色分けされており、古くから存在していたことは明らかです。

どこの灯台にもない角島灯台のレンガ建築には、竹内仙太郎と共に菅



図－3　森川重徳　菅島灯台工事官員記録
（大隈文書燈台寮建築事務摘要より）

図－4　竹内仙太郎角島灯台建築出張辞令
（燈光昭和37年１月号掲載記事より）



図－5　角島灯台彩色図
（作成年代不詳下関市所蔵）

島灯台の工事にも携わっていた森川親方が関わっていたことは容易に考えられます。

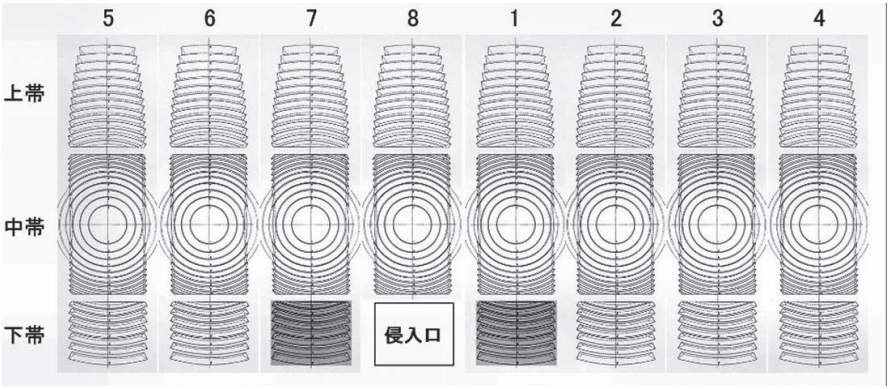
角島灯台のレンズ

考課状の報告にあるとおり、予定した角島灯台の竣工は明治8（1875）年12月30日であった記録が工部省第一年報（明治9年編纂）の燈台寮の報告に見られます。点灯開始は灯台入口の記念額にも刻まれている明治9（1876）年3月1日です。ブラントンは、同年3月15日に、日本の灯台建設の任期を終え、イギリスに帰国しています。角島灯台は、帰国直前の2週間前に点灯開始しています。その後に点灯する尻屋埼、金華山灯台までの25基の灯台をブラントンの灯台とされていますが、最後の2基の灯台の点灯を見ずして、ブラントンは帰国しています。角島灯台は、ブラントンが日本滞在時の最後の灯台でした。

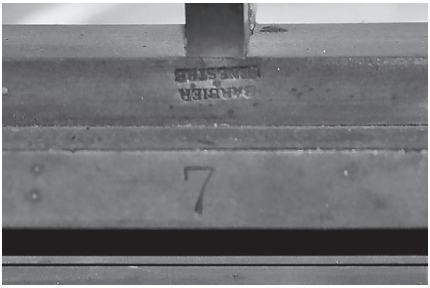
灯台竣工から点灯開始までの空白の約2カ月間に、調整設置されたと推測される一等級の大型レンズは、令和の現在も使われています。現役の最古の一等級レンズです（図6）。

図－6
角島灯台一等級八面レンズ
（令和4年度門司保安部提供）

高さ約2・6メートルの八面のレンズは、それぞれ上帯・中帯・下帯に分かれ、中帯のレンズ枠にはそれぞれ1～8までの数字が刻まれています（図8）。8番目の下帯のレンズは取り外されレンズ内部への侵入口とな



図－7　角島灯台一等級八面レンズ展開図



図－８　左：７番上帯枠の刻印と中帯枠の番号、右：７番中帯枠と下帯枠の刻印

っているため、レンズは23個のレンズ枠から構成されています（図７）。この23個のレンズ枠すべてに製造メーカーの刻印が見られます。21個がBARBIER & FENESTRE、侵入口両脇の２個の下帯がL SAUTTER & CIEです。両社は、19世紀のフランスの二大灯台レンズメーカーです。角島灯台のレンズは非常に珍しいフランスのレンズメーカー合作のレンズです。

しかし、レンズの侵入口脇の骨子に取り付けられている銘板（図９）には、EDINBURGH 1874と刻まれておりレンズはイギリス製とされています。この銘板には点灯開始当時の10秒１閃光の灯質が刻まれています。レンズの銘板に灯質が表記されているものは、他に例がありません。そもそもこの時期のレンズには刻印はありますが、レンズに銘板が付いているのは角島灯台だけです。ブラントンの灯台には、これと同じ様な銘板が、鍋島、釣島の両灯台に見られますが、レンズではなくレンズ台に取り付けられています（図10）。妙なことに、角島灯台の銘

図－10　上：鍋島灯台レンズ台の銘板
下：釣島灯台レンズ台の銘板

図－９　角島灯台のレンズの銘板

板は横書きの英文が読みにくい縦に取り付けられています。愚生は角島のレンズの銘板に違和感を覚えます。

違和感のある銘板の例として、灯籠の屋根に取り付けられている白洲灯台の巨大なBARBIERの銘板（図11）があります。現在ある二代目白洲灯台は、明治33年4月に建造されています。日本の灯台の灯籠は、明治10年代から既に横浜の航路標識管理所内の工場で造られていたことが、暦年の逓信省年次報告書の工場製造品目表にて明白ですが、白洲灯台の灯籠には前記のフランスのBARBIER & FENESTREの社名変更後のBARBIER & BENARDの銘板が、灯籠内板のそり具合とは相反する不自然な形状（局面）で取り付けられています。

図－11　白洲灯台の灯籠屋根の銘板

二代目白洲灯台には、レンズを電気で回転させる日本最初の回転機構（回転装置と付属装置）が設置されていました。全装置は、仏國「バビエール」會社の製造であったと航路標識管理所第一年報に図と共に紹介されています。銘板は、レンズに取り付け不可能な大きさからも、この回転機構本体に取り付けられていたもので、撤去後に銘板だけ灯籠屋根に移し替えられたことが考えられます。

図－12　海上保安庁燈台部工場製の角島灯台の回転機構（海上保安試験研究センター保管の昭和28年製造品アルバムより）

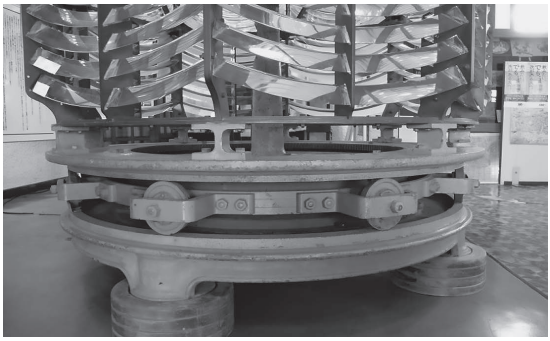
角島灯台の回転機構一式はその後、昭和28年に海上保安庁燈台部工場で製造されたもの（図12）に変更され、巻揚げ機は後年撤去され、現在灯台記念館に展示保管されています。

初代の回転機構は白洲灯台と同様現存せず、フランス製だったのか、イギリス製だったのか詳細な記録も残されて

いません。回転機構の撤去時に、銘板だけレンズに移設されていた！なんて記録がもしあったなら、愚生のレンズ銘板に対する違和感はきっとなかったような気がします。

角島灯台の回転周期

角島灯台の特徴のひとつに、当時では珍しい10秒1閃光の灯質があります。角島灯台は前記の昭和28年に水銀槽を設置する以前は、轉轆装置（図13）でレンズを回転させていました。轉轆装置は、複数のローラー（轉轆）でレンズ台を回転させるため摩擦が大きく、速い回転ができないとされていますが、角島灯台は轉轆装置の灯台では異例の速さでレンズが回転していたようです。



図－13　美保関灯台の轉轆装置
（美保関ビュッフェにて展示）

角島灯台と同じ一等級八面レンズの轉轆装置の灯台は、角島も含め9基ありました。点灯開始順に御前埼、犬吠埼、角島、大瀬埼、鞍埼、襟裳岬、屋久島、伊江島、美保関と全国に及びます。灯質は30秒1閃光が7基、屋久島は1分間に1閃光で、10秒1閃光の角島は9基の中で際立って速い点灯周期でした。轉轆装置の回転周期は、レンズ面×点灯周期で算出されるため、30秒1閃光は240（8×30）秒、屋久島は480（8×60）秒となり、角島の80（8×10）秒は桁違いの速さでした。それは、最初から設定されていたことは、前記のレンズの銘板で明らかです。

明治17年刊行の工部統計志燈臺之部に記載の燈臺装置略を見ると、10秒1閃光の灯質が当時規定されていたことが次のとおり記されています。

燈光性質

本邦ニ於テ用ウル所ノ燈光ノ性質ヲ區別シ之ヲ左ニ示ス

不動・白色
・赤色
・緑色
旋轉（てん）・毎十秒時間一閃白色
・毎半分時間一閃白色

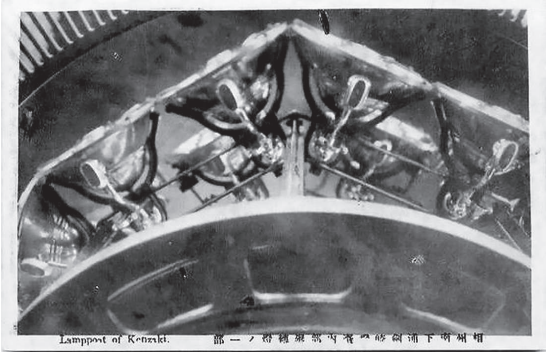
この規定にない1分1閃光の屋久島灯台は、明治30年点灯開始です。明治17年当時はこの5種類の灯質だけであったことは、同年の灯台表（諸標便覧表）でも確認できます。同灯台表に掲載の全灯台（灯船・灯竿含む）52基の内、不動灯の灯台は45基、レンズが回転（旋転）する灯台は7基だけです。灯台はまだ数が少なく、ダークシー（dark sea　真っ暗な海）と呼ばれた当時、点灯するだけの不動灯でも十分の時代でした。7基の回転灯台の灯質は掲載順に次のとおりです。

1　剱　埼　二等　白色　**十秒時毎二一閃光**
2　御前埼　一等　白色　半分時毎二一閃光
3　安乗埼　四等　白色　半分時毎二一閃光
4　樫野埼　二等　白色　半分時毎二一閃光
5　大瀬埼　一等　白色　半分時毎二一閃光
6　角　島　一等　白色　**十秒時毎二一閃光**
7　犬吠埼　一等　白色　半分時毎二一閃光

明治17年当時、角島灯台の他に剱埼灯台だけが同じ10秒1閃光でした。剱埼灯台は、角島灯台のようなフレネルレンズではなく、多数の反射器付レンズを備えた装置でした。その様子が、英字新聞JAPAN WEEKLY MAILの灯台視察船テーボール号同乗記1872年1月13日（明治4年12月4日）付の剱埼灯台訪問記事に次のとおり見られます。

燈台寮は、相模の灯台（剱埼灯台）にフォルフォタル式を採用した。そして毎10秒に1閃光にするために、21個の反射器を3個ずつ7つの枠に取り付けた。この枠は回転して十秒毎に航海者に向けて閃光を発する。遠く海上にいる者は、枠の各面に据えられた3個のランプの光線の中に入った時、10秒毎に閃光を見るのである。21個のランプは、大きな鉄製の台上に据付けてあり、この台は前述の燈室の回転装置に連結しているのである。

図14の絵葉書は、剱埼灯台の反射器付レンズ21個の一部を鉄製の台の下から撮影した写真です。記事のとおり3個のランプが二段の構成で設置されていたことが分かります。一つの光芒となる3個の反射器をレンズ1面と捉えれば、7面のレンズに相当するため、轉轆装置の回転周期は7×10＝70秒と算出され、角島灯台よりも更に速いスピードで回転していたことになります。



図－14　絵葉書剱埼灯台のレンズ台下部からの反射鏡付レンズ
（表題：相州南下浦剱崎燈臺内部廻轉燈ノ一部）

轉轆装置はいったい最大どれ位のスピードで回転していたのでしょうか？

日本の灯台の歴代の文献は、回転装置に関しては水銀槽の解説がほとんどで、轉轆装置の詳細な説明は全くありませんでした。

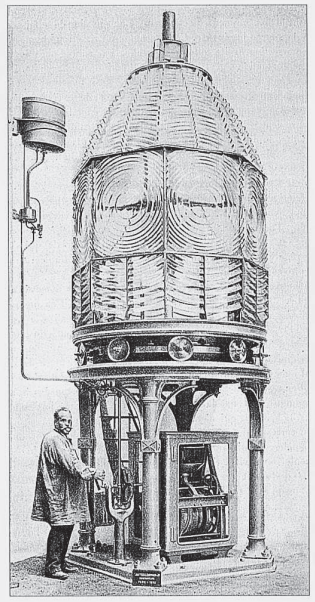
フランスの灯台歴史書PHARES（「灯台」、Chasse-maree社１９９９年発行）には、１８２５～１８８０年代の「技術革新」の章に次のような説明が見られます。

点滅光（Feux scintillants）

１８６０年に物理学者レオン・フーコー（Leon Foucault）が等時性レギュレーターを発明すると、状況は大きく変わりました。航行条件は改善され、海図は以前よりもはるかに正確で信頼性が高くなりました。そして蒸気が普及し、船が加速化されました。これらの要因により、航海者は灯台の点滅の時間を短くするよう要求するようになりました。点滅が長すぎると、迅速かつ頻繁に灯台を確認することができなくなるからです。当初、灯台局はレンズの数をさらに増やすという従来の方法でユーザーの期待に応えました。24枚のレンズからなる光学システムを設計しました

が、依然として8分で回転していました。このタイプの最初の一等レンズは、1861年8月3日にビアリッツ（Biarritz）に、1863年12月19日にウエサン島のクレアッシュ（Creac'h d'Ouessant）に設置されました。

この経験を経て、灯台局はレンズ台のローラーと回転機構を改善し、回転速度を上げることに努めました。この改善により、回転時間が8分から96秒に短縮されました。従って24枚のレンズを備えた大型レンズは、4秒毎に点滅光を発しました。このタイプの最初のロシュ・ドゥヴル灯台（phare des Roches-Douvres）は、1868年　12月15日に試験的に点灯され、8ヶ月後に正式に点灯開始しました。



図－15　「PHARES」に掲載の一等八面レンズと轉轆装置の回転機構

点滅光は、1868年9月15日に新たに点灯した四等級のベルク（Berck）とベルイルのプーラン（des Poulains（Belle-Ile））など、重要ではない灯台にも取り付けられました。これらの小さな装置の場合、6枚のレンズで構成され、30秒で回転し5秒毎に点滅光を発しました。

日本の最初の観音埼灯台が点灯開始する1869年以前のフランスの灯火の変遷です。水銀槽がフランスで発明されたのは、この20年以上後の1892年です。当時すでに一等レンズの回転装置は8分から96秒にまで短縮され、四等レンズは30秒であったとされています。角島灯台の点灯は、この8年後に当たります。また、剱埼灯台はフレネルレンズではなかったことから、実際の二等のフレネルレンズより軽量だったことが十分に考えられます。角島と剱埼灯台の轉轆装置の回転は、当時の技術水準では極端に速いわけではなかったようです。

（明治の灯台の話73　角島灯台（前編））

もてなしの心で！
「灯台絵画コンテスト２０２３」表彰状伝達式を開催しました!!

「灯台のある風景」をテーマに開催する「灯台絵画コンテスト」（主催：（公社）燈光会　後援：海保）では、毎年、全国の小中学生から数多くの応募作品が集まります。夏休みの帰省先や旅行先で出会った灯台、地元のシンボルの灯台を描いた力作が誕生する中、今回、９９１点もの作品の中から当管区内から３名（小学１年生２名、５年生１名）の受賞者が決まりました。第三管区海上保安本部交通部では、作品を描いてくれた感謝の気持ちと海保業務ＰＲの一環として、令和５年12月２日（土）、横浜海上防災基地において、灯台絵画コンテスト２０２３の表彰状伝達式を実施し、併せて、洋上見学等のイベントを実施しました。

伝達式では、受賞者とそのご家族のほか、特別ゲストとして、燈光11月号に記事が掲載された灯台博士を横浜にご招待しました。

式が開始されるまでの間、受賞者の方々には待合スペースにおいて、海保の広報動画、灯台ペーパークラフト、航路標識用灯器の展示などをご覧いただいたほか、海上保安庁のマスコットキャラクターである「うみまる」と「うーみん」との写真撮影が行われました。

写真１　集合写真

写真２　灯台博士

最初は、緊張の面持ちだった受賞者も「うみまる」と「うーみん」の登場により幾分リラックスされたようで、伝達式では、終始和やかな雰囲気の中執り行われました。

伝達式の後には、巡視船ぶこうの船内見学と、灯台見回り船はまひかりによる横浜港内の洋上見学を行いました。受賞者は、初めて見る巡視船内や横浜みなとみらい21の街並みや灯台を海側から見る体験に終始、歓声があがり、海に関することや海保の業務についての質問がたくさん飛び交いました。

後日、ご家族から「子供がかなり興奮して、色んなことを吸収したのではというくらいキラキラした表情をしていました！」、「こうやって日本の海が守られているのだと実感することができました！」、「おしゃべりうみまるも大人気です！」など、うれしいメッセージが届き、無事に伝達式を終えられた安堵感とともに、ご家族の思い出の一コマに携われたことは非常に良い機会になったと職員一同感じております。

（第三管区海上保安本部交通部企画課）

写真３　うみまるとうーみん

写真４　巡視船ぶこう船内見学

『令和５年度の運用管制官資格認定を完了！』

東京湾海上交通センターでは、令和5年10月19日、本年度4回目となる最後の運用管制官認定証交付式を終えました。これで当センターから令和5年度に計17名の新たな運用管制官が誕生したこととなります。その職員の内訳は、海上保安学校管制課程卒業者6名、保安部等陸上職からの転入者4名、巡視船艇からの転入者7名です。各職員それぞれのキャリアが異なりますが、当センターに配属され、管制課程卒業者は約1か月、そのほかの職員は門司分校での3週間の研修を含む約5か月の訓練を経て認定審査に合格し、国際

航路標識協会（ＩＡＬＡ）の国際基準に準拠した資格でもある本庁交通部長からの認定証及び運用管制官き章をセンター所長から受領しました。それらの事務に対応いただいた本庁、三本部及び門司分校関係職員に対して、紙面を借りてお礼申し上げます。

交付式の中でセンター所長からの挨拶として、以下のメッセージが新人運用管制官に贈られました。

『四面を海に囲まれたわが国において、船舶交通の安全確保は不可欠であり、安全な航海を陸上から支えることを明治の初期から燈台守が、いや、古墳時代以前から烽火でもって行い続けています。当時は、航行船舶に向けて、灯りを照らして、灯火の位置・方位を提供することでしたが、現在は、海上交通センター運用管制官が、レーダーやＡＩＳから得られる情報を無線電話で航行船舶に伝える形に変貌しています。我々は現在の「燈台守」であり、これまでと変わらない「守燈精神」で、その使命を果たしているのです。先輩達が築き上げた伝統、国民から得ている信頼を堅守し、時代の変化と共に、手法や業務の幅を変えながらも、船舶交通の安全確保と運航効率の向上のため、これからもスキルアップに努めてほしい。』新人の運用管制官達は、「運用管制官き章」を第一種・第二種制服に装着し、改めて、自らの使命を果たすことを誓っていました。

（東京湾海上交通センター）

運用管制官認定証交付式（１回目）

認定証及びき章を受領後に記念撮影

資格認定審査（実技審査）

門司分校研修（実習）

き章の装着

新たに管制官としてのスタート

海上交通センター運用管制官の「き章」

航路標識についての国際的なシンボルである「松明を掲げた人魚」を配することにより、内外に航路標識に係る職員であることを示す。
人魚の周りで泳ぐ小魚は、運用管制官の支援により安全な航海をする船舶を示す。

「レーダースコープ」を配し、海上交通センターにおいて航路を監視し、通航船舶に情報提供を行う職員であることを示す。

「鵄の両翼」を配し、今後益々航路の安全に寄与する運用管制官の飛翔力を表す。また、鵄は、日本神話において安全に目的地まで案内した鳥であることから、船舶が安全に目的地まで航行するよう支援する運用管制官を表す。

・・・四管区・・・

航路標識灯火監視協力者へ保安部長表彰贈呈

11月1日の灯台記念日にあたり、永年航路標識灯火監視に協力した西三河漁業協同組合栄生支所へ、名古屋海上保安部長から表彰状（感謝状）の贈呈が行われました。被表彰者は、平成25

名古屋海上保安部長　西三河漁業協同組合栄生支所長

年1月から10年の永きにわたり栄生灯台の監視協力を行ったものです。

この標識は、大正14年2月15日に栄生灯柱として初点灯をし、その後海上保安庁が管理しています。

贈呈式後には、地元の新聞社から組合長へ取材があり、組合長からは、灯台は栄生漁港に出入りする漁船の目標となっており、今でも漁師にとってなくてはならない存在です。これからも港の安心・安全のため協力させていただきますとの一言をいただき、大変心強く感じた一幕でした。

（名古屋海上保安部交通課）

来年の金賞を目指して

「灯台絵画コンクール２０２３」（公益社団法人燈光会主催）の入賞者に対し、保安部次長（交通・航行安全担当）が伝達を行いました。

名古屋海上保安部の管轄区域では、小学生低学年の部で銀賞1作品、銅賞1作品が選ばれました。その中の1人が、なんと昨年銅賞を受けた美浜町立布土（ふっと）小学校の1年生の作品であり、学校の先生たちは2年連続での受賞、それも銀賞ということに驚いていました。

受賞者の横田鈴乃さんは、昨年銅賞を受賞した横田雪乃さんの妹ということで、伝達式に来られた横田さんのおかあさんと横田さんが通う絵画教室の先生も大変喜んでいました。

保安部から受賞のお祝いとして、保安協会のグッズを差し上げたところ、鈴乃さんは潜水士のぬいぐるみに大変喜んでいました。

また、絵画教室の先生から「横田姉妹は金賞を狙いたい」との意気込みがあること「来年の灯台絵画コンクールには多数の児童が応募するよう伝えます」とコメントをいただきました。

このコンクールを通じて、親しみやすく地域の人達に愛されている灯台が増えることを切に願います。

（名古屋海上保安部交通課）

鈴乃さんのお母さん、次長、鈴乃さん、校長、絵画教室先生

伝達式

これまで最大の国際クルーズ船が名瀬港に寄港
～ノルウェージャンジュエル 93,502トン～

10月26日、奄美大島の名瀬港にこれまで最大の国際クルーズ船が寄港しました。

寄港したのは、ノルウェージャンジュエル（バハマ船籍、93,502トン）で、11時に前寄港地の長崎県の佐世保から名瀬港観光船岸壁に着岸、乗客約2,300人が奄美大島の美しい自然や文化を楽しみ、19時過ぎには次の寄港地の那覇に向けて出港しました。

ユネスコの世界自然遺産の奄美大島では、今後、島外からの観光客の増加が見込まれます。

奄美海上保安部は、住民と来島者が安心して安全に奄美群島の豊かで美しい自然を楽しめるように、マリンレジャーなどによる海の事故防止に努めます。

（奄美海上保安部）

沖永良部島でラジオ工作教室開催＆国頭岬灯台を初公開
～奄美群島日本復帰70周年・国頭岬灯台50周年に感謝～

奄美群島日本復帰
70周年

奄美群島は、今年で日本復帰70周年、そして沖永良部島の最北端の海のみちしるべ国頭岬灯台も設置から50周年を迎えます。沖永良部の皆様のこれまでの海上保安業務へのご理解とご協力に感謝を込めて、10月29日、和泊町中央公民館で、ラジオ工作教室を開催、沖永良部の小学生20名と保護者らが参加しました。

工作教室は、日本無線㈱のボランティアスタッフと海上保安部職員のサポートで行いました。

いよいよ工作開始、子供達がラジオキットの包みを開くと、「ホントに作れるかな?」不安の声が上がりました。アンテナのコイル巻きや半田ごてを使

完成したラジオに満面の笑み

聞こえたよ！

工作に夢中

国頭岬灯台

灯台踊り場風景

参加された児童ら

って部品の取付けを始めると、雰囲気は一転、真剣な空気に包まれました。

完成して、ラジオから音が聞こえると、満面の笑み、イヤホンを耳にあて、地元のラジオ放送を夢中で聞き入りました。

日本無線㈱のボランティアスタッフの皆様のご協力、(公社)燈光会と(一財)日本航路標識協会のご支援に深く感謝いたします。

そして、10月30日、国頭岬灯台を初公開。和泊町立国頭小学校の児童24名と和泊中学校の生徒44名及び教諭並びに和泊町の前町長や町の職員など約90名が参加しました。

児童、生徒は、海上保安業務や灯台など航路標識の役割やしくみなど学習、普段は登れない灯台の上から沖永良部ブルーの美しい空と海や緑の大地の絶景に大歓声をあげました。

前町長は、奄美海上保安部長が委嘱する国頭岬灯台の灯火監視協力者、20年間も灯台の灯りを見守り続け、台風の通過後には灯台の施設が壊れていないか、灯台まで足を運んで確認もいただきます。さらに、町長のお父様も20年間、灯火監視協力者を務められ、親子で40年もの間、ご協力いただいています。町長が、参加した小学校の児童に、「君達は、沖永良部島の宝、この灯台の灯りのように、いつまでも輝き続けて、沖永良部のために役立ってください。」とあいさつされました。新聞1社とケーブルテレビが取材、広く報道されました。

公開にあたり、和泊町や教育委員会のご協力と(公社)燈光会及び(公財)海上保安協会のご支援に深く感謝いたします。

奄美海上保安部は、地域の皆様との絆を大切に、安全安心に努めます。

（奄美海上保安部）

第18弾 のぼれる灯台（16基）スタンプラリー達成者

全国北から南までの16灯台巡っていただき、誠にありがとうございました。
達成者の皆様、おめでとうございます！

第143号

藤本　英樹 様（50代）兵庫県西宮市在住

☆ **スタンプラリー開始年月日**
平成31年３月21日　都井岬灯台

☆ **スタンプラリー達成年月日**
令和５年２月21日　平安名埼灯台

☆ **スタンプラリーを始めたきっかけ**
全国灯台を知ることが出来たので。（キッカケかな？）

☆ **16か所巡った感想**
途中コロナもあり、旅行が出来ない時期もありましたが、やっと達成でき、感激です。

第144号

Y.W 様（48歳）神奈川県横浜市在住

☆ **スタンプラリー開始年月日　令和３年７月18日　観音埼灯台**

☆ **スタンプラリー達成年月日　令和５年２月22日　残波岬灯台**

☆ **スタンプラリーを始めたきっかけ**
令和３年３月13日に平安名埼灯台で１回目のスタンラリー制覇した際に、２回目を達成した方がいなかったので、やってみようと思ったからです。

☆ **16か所巡った感想**
無事に２回目のスタンラリー制覇を達成できて良かったです。これからも３回目の達成や全国灯台カード収集に力を入れて行きたいと思います。